

説明

2.a 資産の説明

2.b 歴史と発展

The Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region

説明

2.a 資産の説明

2.a.1 資産全体の説明

本資産は、「神宿る島」を崇拝する文化的伝統が、古代東アジアにおける活発な対外交流が進んだ時期に発展し、海上の安全を願う生きた伝統と明白に関連し今日まで継承されてきたことを物語る稀有な物証である。

本資産は、宗像大社沖津宮、沖津宮遙拝所、中津宮、辺津宮と新原・奴山 古墳群からなる。本資産の起源となる沖ノ島は、日本列島と朝鮮半島との間の 海峡にあり、九州北部の宗像地域から 60km北西に位置する (図 2-a-1)。沖ノ島 は、日本から大陸へと向かう航海において道標となる島であり、またその荘厳さ を感じさせる外観から、神宿る島として信仰の対象となっていった。

この海域では、航海術に長けた古代¹豪族宗像氏²が海を越えた交流に重要な役割を果たしていた。宗像氏は、宗像地域を支配し、沖ノ島の祭祀を執り行う一族であった。4世紀後半に日本と中国、朝鮮の古代王朝との交流が活発化すると、沖ノ島で航海の安全と交流の成就を願う祭祀が行われるようになった。この沖ノ島で行われた大規模な祭祀は、一地域の祭祀ではなく日本の古代国家³(ヤマト王権、律令国家)が関与した祭祀として、「国家的祭祀」と本推薦書では称している。古代国家は宗像氏と密接な関係を結ぶことでこの「国家的祭祀」を行い、中国、朝鮮の古代王朝との交流を実現したのである。

沖ノ島における古代祭祀遺跡は、その隔絶した立地や入島を制限する地域の禁忌などによってほぼ手つかずの状態で良好に守られてきた。その祭祀形態は4世紀後半から9世紀末までの約500年の間に、岩上祭祀一岩陰祭祀一半岩陰・半露天祭祀一露天祭祀の四段階の変遷をみせる。発掘調査では約8万点の貴重かつ大量の奉献品が出土し、1962年よりそれらはすべて国宝に指定されてきている。奉献品の内容は祭祀形態の変遷に伴って変化し、各時期の対外交流の実態を物語る希少な舶載品も含まれている。さらに奉献品の中には、律令国家によって体系化され、神道における祭祀の直接のもととなった神祇祭祀で用いられたものが見出される。現代に生きる日本固有の信仰である神道の具体的な様相を記す文献記録は8世紀以降のものしか存在しない。然しながら沖ノ島祭祀遺跡は4世紀後半に遡る。その古代祭祀の変遷は日本固有の信仰の形成過程を示すものである。沖ノ島祭祀遺跡は、古代日本の自然信仰に基づく祭祀が、現在の祭祀に形成されていく過程を証明する唯一の祭祀遺跡である。

- 1 本推薦書では、日本の「古代」 を 3 ~ 11 世紀とする。
- 2 本推薦書では、古代の宗像地域 の有力な政治勢力とその配下に ある多様な階層の人々を総称して 「宗像氏」と表記する。.
- 3 本推薦書では、古代の日本列島 に存在した政治権力であるヤマ ト王権及び律令国家を総称して 「古代国家」と表記する。

ヤマト王権:3世紀半ばから7世紀末に、畿内(日本の中央)周辺の有力氏族が連合して成立した政治権力・政治組織。国際的には倭と呼ばれていた。

律令国家:ヤマト王権が発展し、 701年の大宝律令(律は刑法、 令は行政法)の制定により成立 した古代日本の中央集権国家。 新原・奴山古墳群は宗像氏の墳墓群である。優れた航海術を持ち、対外交流に従事した宗像氏は、沖ノ島祭祀が隆盛した時期に、入海に面した台地上に大小様々な41基の墳墓群を築いた。この台地上からは、大島、さらに沖ノ島、朝鮮半島へと続く海を一望することができる。新原・奴山古墳群の立地は、航海の道標である沖ノ島と本質的につながっており、航海の安全を願い沖ノ島での祭祀を担った人々の存在を証明する。

7世紀後半以降、大島の最高所と九州本土の入海に面した丘陵上においても、沖ノ島祭祀と同様の露天祭祀が行われるようになった。これらの祭祀の跡が中津宮の御嶽山祭祀遺跡、辺津宮の下高宮祭祀遺跡である。三箇所の祭祀の場は、8世紀初めに編纂された日本で最も古い歴史書である『古事記』『日本書紀』に、宗像氏が宗像三女神(田心姫神、浩津姫神、市杵島姫神)をまつる地としてそれぞれ「奥津宮」「遠瀛」、「中津宮」「中瀛」、「辺津宮」「海浜」と記されている。これは、三箇所の祭祀遺跡の存在が同時期の文献の記述と一致する事例であり、広大な海で結ばれた三つの宮で構成される宗像大社⁴の信仰の原型が古代に遡り、現代まで継承されてきたことを意味する。

4 「宗像大社」の社名は、1977 年 に「宗像神社」から改名された ものである。

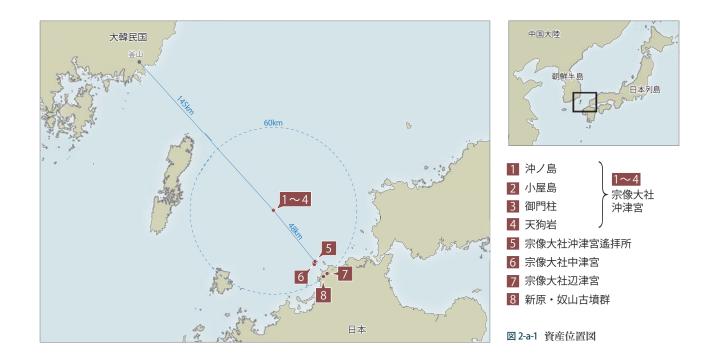




図 2-a-2 信仰空間としての本資産の発展



通常渡島できない沖ノ島を拝むための沖津宮遙拝所が設けられる。

宗像大社では、現在もみあれ祭をはじめとする神事や祭事が行われ、宗像 三女神に対する信仰が続いている。古代祭祀が行われなくなった後も、宗像大 宮司家によって沖ノ島を含む宗像大社の信仰は受け継がれ、大宮司家は盛んな 対外交易を行って栄えた。大宮司家が断絶した 16 世紀末以降も、神官や地域 の人々がその信仰を支えていった。宗像三女神は、日本固有の信仰における水 上での安全や水に関わる普遍的な神格(信仰の対象)として、宗像地域の他に 日本全国にも伝播した。

沖ノ島祭祀遺跡がほぼ手つかずのまま現代まで伝えられたことは、その隔絶された地理的要因に加え、入島を制限する禁忌などの伝統が地域に根付いてきたことによる。沖ノ島周辺では漁業が行われ、17世紀から20世紀までは国境域の警戒のための見張りが駐在したが、みだりに入島することや物を持ち出すことなどに対する禁忌などの慣習は絶えず尊重されていた。18世紀までに大島の北側に設けられた沖津宮遙拝所は、厳重な禁忌で通常渡島できない沖ノ島を大島から拝むためのものである。遙拝所の存在は沖ノ島に対する信仰の継承を示している。



写真 2-a-1 資産空撮

2.a.2 構成資産の説明

構成資産1~4:宗像大社沖津宮

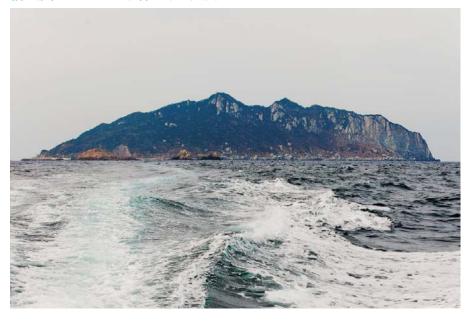


写真 2-a-2 沖ノ島全景

沖ノ島で4世紀から9世紀にかけての活発な対外交流の時期に古代祭祀が行われ、その遺跡が禁忌とともに現代まで守り伝えられてきた。

宗像大社沖津宮は、九州北部の宗像地域から 60km 離れた 1. 沖ノ島およびその付随する岩礁である 2. 小屋島、3. 御門柱、4. 天狗岩からなる信仰の場である。沖ノ島は周囲約 4km、面積約 68.38ha、最高所 243m であり、島そのものが信仰の対象となっている。沖ノ島の南東 1km にある三つの附属する岩礁である小屋島(面積約 1.89ha)御門柱(面積約 0.15 ha)天狗岩(面積約 0.19 ha)(写真 2-a-3)は、沖ノ島と一体のものとして保護されている。物理的に沖ノ島から離れていることから個別の構成資産として区別されているが、沖ノ島と三つの岩礁は価値の観点で実質的に不可分であり、沖津宮という一つの神社を構成している。沖津宮は宗像大社三宮の一つであり、宗像三女神の一柱である田心姫神がまつられ、信仰されている。

九州北部から朝鮮半島へと向かう海路に位置する沖ノ島は、古代から航海の際の道標であり、またその荘厳さを感じさせる外観から、神宿る島として地域の人々の信仰の対象となっていた。4世紀後半から日本と中国大陸、朝鮮半島の古代王朝との交流が活発化すると、航海の安全と交流の成就を願い、沖ノ島で祭祀が開始された。この祭祀は、宗像氏の協力の下に一地域の祭祀を超える規模や重要性をもって行われた、「国家的祭祀」と位置付けられている。沖ノ島祭祀の祭祀形態は四段階に変遷することが明らかになっており、このように明確な古代祭祀の変遷が分かる祭祀遺跡は他にない。さらに、考古学的な調査によって約8万点の他に類を見ないほど豊富かつ質の高い奉献品が出土し、その中には交流によってもたらされたものが含まれる。沖ノ島の祭祀遺跡は良好に保存さ



写真 2-a-3 沖ノ島に付随する三つの 岩礁(右より小屋島、御門柱、天狗岩)



写真 2-a-4 沖津宮社殿



写真 2-a-5 禊



写真 2-a-6 沖ノ島の自然

島の気候は、東シナ海から日本海へと流れ込む対馬暖流の影響で温暖である。ビロウやオオタニワタリといった亜熱帯植物が生育しており、常緑広葉樹高木林で覆われている。その他希少な鳥類や植物類も数多く、島全体が国の天然記念物「沖の島原始林」に指定されている。

れ、祭祀の変遷だけでなく古代日本の対外交流の本質を示すものである。

古代祭祀の終了後も沖ノ島は「神宿る島」として受け継がれ、17世紀まで人が常駐することはなかった。古代祭祀が行われた巨岩の間に位置する社殿は、17世紀半ば以前に建てられた。現在の沖津宮社殿は1932年に再建されたもので、田心姫神がまつられている(**写真 2-a-4**)。

このような沖ノ島信仰は、今日まで続く厳重な禁忌を生み出していく。全裸になり海中で穢れを払う「禊」(写真 2-a-5)をしなければ上陸してはならない、女性は一切入島してはならない、島で見聞きしたことを口外してはならない、島から一木一草一石たりとも持ち出してはならない、島内で四足の動物を食べてはいけない、縁起の悪い言葉は「忌み言葉」として別の言葉で言い換えるなど、これらの禁忌によって、沖ノ島は古代祭祀が行われた時代の姿のまま現在まで守られている。現在は、宗像大社の神職が1名10日交代で島に常駐し、毎日社殿での神事を行なっている。宗像地域の漁業従事者たちも沖ノ島に対する信仰は篤く、自分たちが沖ノ島を守ってきたという自負を持ち、献魚などして豊漁や漁の安全などを願っている。また、一年に一度、一般の男性が200名に限り沖ノ島に渡島して参拝することが許可される沖津宮現地大祭が行われている。

三つの付随する岩礁は沖ノ島に上陸する際の天然の鳥居の役割を果たしており、今も沖ノ島に向かう船は岩礁の間を通り、港へと入っていく。

このように、沖ノ島祭祀遺跡や島の豊かな自然は、厳重な禁忌などの信仰に 基づく伝統によってほとんど人の手が加えられることなく維持されてきた。古代から続く「神宿る島」沖ノ島への信仰は、現在に至るまで生き続けている。

表 2-a-1 宗像大社沖津宮関連年表

西曆	事項
4世紀後半~5世紀前半	岩上祭祀
5世紀後半~7世紀	岩陰祭祀
7世紀後半~8世紀前半	半岩陰・半露天祭祀
8世紀~9世紀	露天祭祀
712	『古事記』成立。「奥津宮」の名称と宗像三女神神話が記載される。
720	『日本書紀』成立。「遠瀛」の名称と宗像三女神神話が記載される。
1639	福岡藩が、沖ノ島警備のため「島守」を置き、50日交替とする。
1644	沖津宮社殿の存在を示す初見。
1682	「御国絵図」成立。沖ノ島を描いた最古の絵図。岩礁も描かれ、「小屋島」「御門柱」と表記される。
1703	地誌『筑前国続風土記』成立。沖津宮には約 2.7m 四方の本殿と拝殿があると記す。
1794	『瀛津島防人日記』の著者、青柳種信が藩命により沖ノ島警備のため福岡を出発し、大島を経て沖ノ島に渡る。
1797	地誌『筑前国続風土記』成立。同書所収「大嶋図」に沖ノ島も描かれる。
1926	沖ノ島が史蹟名勝天然記念物保存法 (文化財保護法の前身) により「沖の島原始林」と して国天然記念物に指定される。
1932	現在の沖津宮本殿と拝殿が再建される。
$1954 \sim 1971$	3次にわたる沖ノ島祭祀遺跡調査。
- 第 1 次調査 (1954 ~ 1955)	1~5、13 号遺跡の現状把握と7、8、16 号遺跡の調査。17 号遺跡の発見。
- 第 2 次調査 (1957 ~ 1958)	8号遺跡の未調査部分と16、17、19号遺跡の調査。8号遺跡の残存遺物の確認、18号遺跡の現状把握。
- 第 3 次調査 (1969 ~ 1971)	1、4、5、6、21、22 号遺跡の調査。
1962	沖ノ島出土遺物が文化財保護法により国宝に指定される(これ以降数度の追加指定が 行われる)
1971	文化財保護法により「宗像神社境内」の一部として沖ノ島が国史跡に指定される。
2010	沖ノ島の自然林が福岡県のレッドデータブックに記載される(植物群落、カテゴリーIV)。
2012	保存管理計画策定に伴う環境調査。第 1 回調査 8 月 7 日~ 10 日。第 2 回調査 10 月 9日~ 12 日。
2014	「国指定史跡宗像神社境内保存管理計画」、「国指定天然記念物沖の島原始林保存管理計画」策定。
2015	付随する三つの岩礁、小屋島、御門柱、天狗岩が史跡「宗像神社境内」に追加指定される。



図 2-a-3 宗像大社沖津宮平面図

沖ノ島祭祀遺跡

沖ノ島の南西側、標高 80 m から 90 m にある沖津宮社殿周辺の巨岩群を中心とした地域に 22 箇所の祭祀遺跡がある ⁵。1954 年から 1971 年の間に三次にわたって、島の一部で発掘調査が行われた。その成果として、4 世紀後半から 9世紀末の約 500 年の間に、四段階に祭祀形態が変遷したことが判明した。

調査終了後、祭祀遺構は調査で検出された状態のまま埋め戻され、今日も地中で保存されている。

5 遺跡の番号は23号遺跡まであるが、14号遺跡と20号遺跡は同じ遺跡であるため実際の遺跡数は22遺跡である。

岩上祭祀

4世紀後半~5世紀前半

沖ノ島の古代祭祀は、島内の巨岩の上で始まった。岩上祭祀として5箇所の祭祀遺跡(I号巨岩周辺の16、17、18、19号遺跡及びF号巨岩上の21号遺跡)が確認され、発掘調査が行われた。これらの祭祀遺跡は調査まで手つかずのまま保存されており、古代祭祀の奉献品が供えられた当時の状態で出土した。出土した奉献品は、鏡、装身具、武器、工具などである。

特に17号遺跡(**写真 2-a-7**) からは21面もの鏡が岩と岩との間に奉献されたままの状態で発見された。このような多数の鏡が奉献された祭祀遺跡の事例は、日本で他に知られていない。さらに、21号遺跡では東西南北を四隅として方形状に礫を並べ祭壇の遺構が確認された。

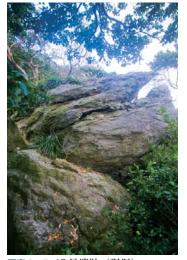


写真 2-a-7 17 号遺跡 (現況)

岩陰祭祀

5世紀後半~7世紀

5世紀後半から7世紀にかけては、庇状になっている巨岩の陰で祭祀が行われた。岩陰は雨だれや日の差すことの少ない場所であることから、草木が生えず、また土もほとんど堆積せず、調査時には奉献品が枯葉の下に当時のままの状態で残されていた。遺跡の中でも最も数の多い12箇所の祭祀跡が確認されており、そのうち4、6、7、8、22号遺跡で調査が行われた(9、10、11、12、13、15、23号遺跡は未調査)。

D号巨岩の南西側にある7号遺跡(写真2-a-8)では朝鮮半島系の金製指輪が、北西側の8号遺跡からはイランのササン朝ペルシア産とされるカットグラス碗片が出土している。他にも、朝鮮半島、そして大陸との交流を示す馬具などの物証が発見された。

7世紀に入り、他の巨岩から少し離れた M 号巨岩の南側にある 22 号遺跡で祭祀が行われた。 22 号遺跡では、岩陰に平坦面が少なくすぐ傾斜地となるので、岩陰いっぱいに石組みによる祭壇面をつくり、奉献品を並べて置いている。

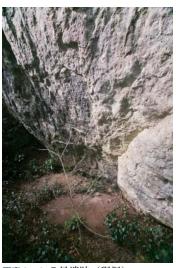


写真 2-a-8 7号遺跡 (現況)

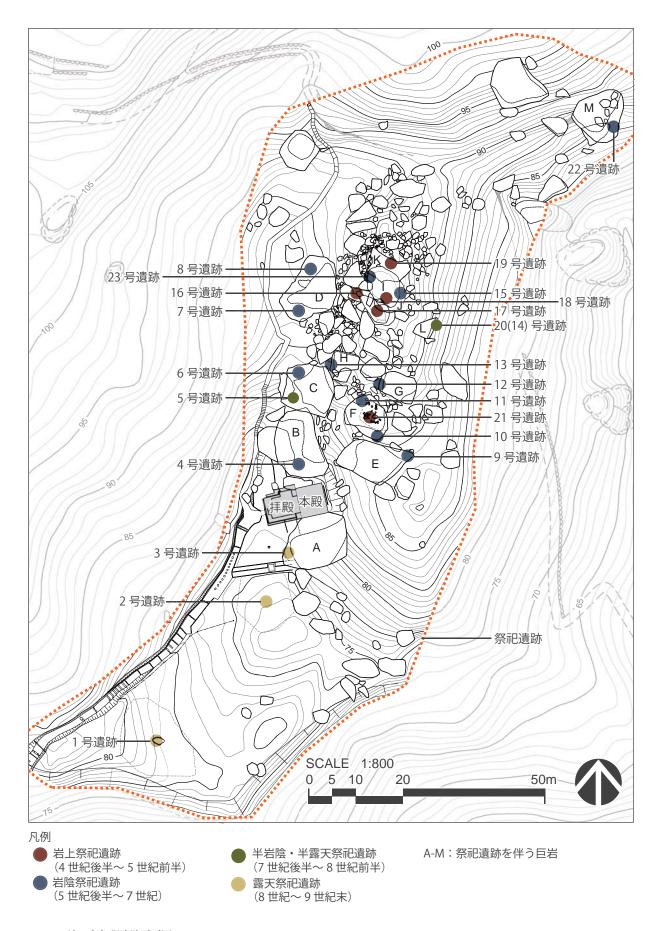


図 2-a-4 沖ノ島祭祀遺跡平面図

表 2-a-2 沖ノ島祭祀遺跡の保存状況

1	遺跡番号	祭祀形態	調査年	発掘面積	保存状況
大発掘 (1955 年遺跡確認) 一 日 日 日 日 日 日 日 日 日	1	露天祭祀	1970年 (第 3 次調査)	24 m ²	88% 残存
4 岩陰祭祀 1954年(第1次調査) 27 m² 調査後埋め戻し 5 半岩陰・半露天祭祀 1969年(第3次調査) 13 m² 調査後埋め戻し 6 岩陰祭祀 1969年(第3次調査) 21 m² 調査後埋め戻し 7 岩陰祭祀 1954年(第1次調査) 27 m² 調査後埋め戻し 8 岩陰祭祀 1954年(第1次調査) 43 m² 調査後埋め戻し 9 岩陰祭祀 未発掘(1955年(第2次調査) - 10 岩陰祭祀 未発掘(1955年遺跡確認) - 11 岩陰祭祀 未発掘(1955年遺跡確認) - 12 岩陰祭祀 未発掘(1955年遺跡確認) - 13 岩陰祭祀 未発掘(1955年遺跡確認) - 14 半岩陰・半露天祭祀 1954年遺跡確認) - 15 岩陰祭祀 未発掘(1955年遺跡確認) - 16 岩上祭祀 1954年(第1次調查) 4 m² 調査後現状を保存 17 岩上祭祀 1957年(第2次調查) 2 m² 調査後現状を保存 18 岩上祭祀 1958年(第2次調查) 2 m² 調査後現状を保存 19 岩上祭祀 1958年(第2次調查) 23 m² 調査後現状を保存 20 半岩陰・半露天祭祀 1970年(第3次調查) 32 m² 調査後別状を保存 <	2	露天祭祀	未発掘 (1955 年遺跡確認)	_	
4 石陰宗祀 1970 年 (第 3 次調査) 27 m 調査後埋め戻し 5 半岩陰・半露天祭祀 1969 年 (第 3 次調査) 13 m² 調査後埋め戻し 6 岩陰祭祀 1954 年 (第 1 次調査) 27 m² 調査後埋め戻し 8 岩陰祭祀 1954 年 (第 1 次調査) 43 m² 調査後埋め戻し 9 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 10 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 11 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 12 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 13 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 14 半岩陰・半露天祭祀 1954 年遺跡確認、 1970 年 (第 3 次調査) に 20 号遺跡と同一として報告。 15 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 16 岩上祭祀 1954 年 (第 1 次調査) - 16 岩上祭祀 1954 年 (第 1 次調査) - 17 岩上祭祀 1957 年 (第 2 次調査) 4 m² 調査後現状を保存 18 岩上祭祀 1958 年 (第 2 次調査) 2 m² 調査後現状を保存 19 岩上祭祀 1958 年 (第 2 次調査) 23 m² 調査後現状を保存 20 半路除・半露天祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 58 m² 周辺に遭物の散布を確認 21 岩上祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 32 m² 調査後埋めの民し	3	露天祭祀	未発掘 (1955 年遺跡確認)	-	
6 岩陰祭祀 1969 年(第 3 次調査) 21 m² 調査後埋め戻し 7 岩陰祭祀 1954 年(第 1 次調査) 27 m² 調査後埋め戻し 8 岩陰祭祀 1954 年(第 1 次調査) 1957・1958 年(第 2 次調査) 43 m² 調査後埋め戻し 9 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 10 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 12 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 13 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 14 半岩陰・半露天祭祀 1954 年遺跡確認、1970 年(第 3 次調査) に 20 号遺跡と同一として報告。 15 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 16 岩上祭祀 1954 年(第 1 次調査) 4 m² 調査後現状を保存 17 岩上祭祀 1957 年(第 2 次調査) 2 m² 調査後現状を保存 18 岩上祭祀 1958 年(第 2 次調査) 46 m² 調査後現状を保存 19 岩上祭祀 1958 年(第 2 次調査) 23 m² 調査後現状を保存 20 半岩陰・半露天祭祀 1970 年(第 3 次調査) 58 m² 周辺に遺物の散布を確認 21 岩上祭祀 1970 年(第 3 次調査) 32 m² 調査後埋め戻し 22 岩陰祭祀 1970 年(第 3 次調査) 30 m² 調査後埋め戻し </td <td>4</td> <td>岩陰祭祀</td> <td></td> <td>27 m²</td> <td>調査後埋め戻し</td>	4	岩陰祭祀		27 m ²	調査後埋め戻し
岩陰祭祀 1954年(第 1 次調査) 27 m² 調査後埋め戻し 1954年(第 1 次調査) 43 m² 調査後埋め戻し 1957・1958年(第 2 次調査) -	5	半岩陰・半露天祭祀	1969年 (第 3 次調査)	13 m ²	調査後埋め戻し
お	6	岩陰祭祀	1969年 (第 3 次調査)	21 m ²	調査後埋め戻し
8 石陰奈化 1957・1958 年 (第 2 次調査) 43 m² 調査後理め戻し 9 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 10 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 12 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 13 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 14 半岩陰・半露天祭祀 1954 年遺跡確認、1970 年 (第 3 次調査) に 20 号遺跡と同一として報告。 15 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 16 岩上祭祀 1954 年 (第 1 次調査) 4 m² 調査後現状を保存 17 岩上祭祀 1957 年 (第 2 次調査) 2 m² 調査後現状を保存 18 岩上祭祀 1958 年 (第 2 次調査) 46 m² 調査後現状を保存 19 岩上祭祀 1958 年 (第 2 次調査) 23 m² 調査後現状を保存 20 半岩陰・半露天祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 58 m² 周辺に遺物の散布を確認 21 岩上祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 32 m² 調査後祭壇を復元し保存 22 岩陰祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 30 m² 調査後界壇を復元し保存	7	岩陰祭祀	1954年 (第 1 次調査)	27 m ²	調査後埋め戻し
日	8	岩陰祭祀		43 m^2	調査後埋め戻し
岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) -	9	岩陰祭祀	未発掘 (1955 年遺跡確認)	_	
岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) -	10	岩陰祭祀	未発掘 (1955 年遺跡確認)	_	
13 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) -	11	岩陰祭祀	未発掘 (1955 年遺跡確認)	_	
14 半岩陰・半露天祭祀 1954 年遺跡確認、1970 年 (第 3 次調査) に 20 号遺跡と同一として報告。 15 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) - 16 岩上祭祀 1954 年 (第 1 次調査) 4 m² 調査後現状を保存 17 岩上祭祀 1957 年 (第 2 次調査) 2 m² 調査後現状を保存 18 岩上祭祀 1958 年 (第 2 次調査) 46 m² 調査後現状を保存 19 岩上祭祀 1958 年 (第 2 次調査) 23 m² 調査後現状を保存 20 半岩陰・半露天祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 58 m² 周辺に遺物の散布を確認 21 岩上祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 32 m² 調査後祭壇を復元し保存 22 岩陰祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 30 m² 調査後埋め戻し	12	岩陰祭祀	未発掘 (1955 年遺跡確認)	_	
15 岩陰祭祀 未発掘 (1955 年遺跡確認) -	13	岩陰祭祀	未発掘 (1955 年遺跡確認)	_	
16岩上祭祀1954 年 (第 1 次調査) 1957 年 (第 2 次調査)4 m²調査後現状を保存17岩上祭祀1957 年 (第 2 次調査)2 m²調査後現状を保存18岩上祭祀1958 年 (第 2 次調査)46 m²調査後現状を保存19岩上祭祀1958 年 (第 2 次調査)23 m²調査後現状を保存20半岩陰・半露天祭祀1970 年 (第 3 次調査)58 m²周辺に遺物の散布を確認21岩上祭祀1970 年 (第 3 次調査)32 m²調査後祭壇を復元し保存22岩陰祭祀1970 年 (第 3 次調査)30 m²調査後埋め戻し	14	半岩陰・半露天祭祀	1954 年遺跡確認、1970 年 (第 3 次調査	ミ)に 20 号遺跡	。 さと同一として報告。
16右上祭祀1957 年 (第 2 次調査)4 m調査後現状を保存17岩上祭祀1957 年 (第 2 次調査)2 m²調査後現状を保存18岩上祭祀1958 年 (第 2 次調査)46 m²調査後現状を保存19岩上祭祀1958 年 (第 2 次調査)23 m²調査後現状を保存20半岩陰・半露天祭祀1970 年 (第 3 次調査)58 m²周辺に遺物の散布を確認21岩上祭祀1970 年 (第 3 次調査)32 m²調査後祭壇を復元し保存22岩陰祭祀1970 年 (第 3 次調査)30 m²調査後埋め戻し	15	岩陰祭祀	未発掘 (1955 年遺跡確認)	_	
18岩上祭祀1958 年 (第 2 次調査)46 m²調査後現状を保存19岩上祭祀1958 年 (第 2 次調査)23 m²調査後現状を保存20半岩陰・半露天祭祀1970 年 (第 3 次調査)58 m²周辺に遺物の散布を確認21岩上祭祀1970 年 (第 3 次調査)32 m²調査後祭壇を復元し保存22岩陰祭祀1970 年 (第 3 次調査)30 m²調査後埋め戻し	16	岩上祭祀		4 m ²	調査後現状を保存
19 岩上祭祀 1958 年 (第 2 次調査) 23 m² 調査後現状を保存 20 半岩陰・半露天祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 58 m² 周辺に遺物の散布を確認 21 岩上祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 32 m² 調査後祭壇を復元し保存 22 岩陰祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 30 m² 調査後埋め戻し	17	岩上祭祀	1957年 (第 2 次調査)	2 m ²	調査後現状を保存
20 半岩陰・半露天祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 58 m² 周辺に遺物の散布を確認 21 岩上祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 32 m² 調査後祭壇を復元し保存 22 岩陰祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 30 m² 調査後埋め戻し	18	岩上祭祀	1958年(第2次調査)	46 m ²	調査後現状を保存
21 岩上祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 32 m² 調査後祭壇を復元し保存 22 岩陰祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 30 m² 調査後埋め戻し	19	岩上祭祀	1958 年 (第 2 次調査)	23 m ²	調査後現状を保存
22 岩陰祭祀 1970 年 (第 3 次調査) 30 m² 調査後埋め戻し	20	半岩陰・半露天祭祀	1970年 (第 3 次調査)	58 m ²	周辺に遺物の散布を確認
	21	岩上祭祀	1970年(第3次調査)	32 m ²	調査後祭壇を復元し保存
23 岩陰祭祀 未発掘 (1970 年遺跡確認) -	22	岩陰祭祀	1970年 (第 3 次調査)	30 m ²	調査後埋め戻し
	23	岩陰祭祀	未発掘 (1970 年遺跡確認)	_	



写真 2-a-9 5 号遺跡 (現況)



写真 2-a-10 1 号遺跡 (現況)

半岩陰·半露天祭祀

7世紀後半~8世紀前半

7世紀後半から8世紀前半にかけて、祭祀は岩陰と露天との両所にまたがって行われ、露天祭祀へと続く祭祀段階である。遺跡としては、5号遺跡と20号遺跡(14号遺跡)とがある。

5号遺跡 (写真 2-a-9) の代表的な奉献品は、唐三彩長頸瓶や、同じく中国からもたらされたとされる金銅製龍頭である。土器の出土状況から、5号遺跡では土器を規則的に並べて祭祀が行われたことが分かっている。他に、金銅製雛形五弦琴や金銅製雛形紡織具など、後に律令国家によって体系化された祭祀で用いられる品の先駆的形態を示す奉献品が出土している。

露天祭祀

8世紀~9世紀末

8世紀になると、それまで祭祀の場であった巨岩群から南西に約30m下った平坦地で祭祀が行われるようになる。これが四段階の祭祀形態の変遷において最後の段階である露天祭祀である。1、2、3号遺跡の3箇所があり、1号遺跡の一部だけが調査されている。

1号遺跡 (写真 2-a-10) は、194㎡に及ぶ範囲に大量の土器類が散布する祭祀遺跡である。遺跡の東南隅に大石があり、これを中心に十字のトレンチを設定して調査が行われた。この調査によって角礫で形成された祭壇状の石積遺構が見つかった。奉献品は、多種多様な土師器や須恵器を始めとして、唐三彩の技術をもとに日本で作られた奈良三彩有蓋小壺、滑石製品、有孔土器、818年初鋳の銭貨などが出土している。

1号遺跡の調査範囲は確認された奉献品散布範囲の1割程度であり、大部分が未調査のまま、土師器や須恵器、滑石製品などの奉献品が地面から露呈、もしくは地下に埋蔵された状態で保存されている。

沖ノ島祭祀遺跡の分布及び保存状況

沖ノ島祭祀遺跡は全22遺跡のうち9遺跡が未調査で保存されている。調査によって約8万点の奉献品が出土したが、沖ノ島祭祀遺跡にはさらに膨大な量の奉献品が残されている。

2012年には、沖ノ島全域を対象に未確認の祭祀遺跡の有無を調査した。高精度の航空レーザー測量を行い、沖ノ島全域の地形を立体的に表した3次元数値標高モデル(図2-a-5)が作成された。これにより、沖ノ島の詳細な地形や島内にある全ての人工物を把握できるようになった。さらに、人が立ち入ることができる範囲は全て踏査したが、新たな祭祀遺跡の存在は確認できなかった。このように、沖ノ島の祭祀遺跡分布については十分な調査が終了しており、現在確認されている以外の祭祀遺跡が発見される可能性は限りなく低い。

なお、第二次世界大戦以前、国防上の必要性から灯台及び軍事施設が島内に建設された。ただし、建設にあたっては、信仰の場としての沖ノ島に影響を与えないよう十分配慮され、工事は必要最低限で行われた。また、沖ノ島の漁港は、現在も地元の漁業従事者によって利用されているが、古来より伝統的に利用されており、かつ利用頻度も一日数隻に限られる。従って、島内に存在する近代以降に建造された施設が、祭祀遺跡及び信仰の場としての沖ノ島に負の影響を与えることはない。



図2-a-5 3次元数値標高モデル

構成資産5:宗像大社沖津宮遙拝所



写真 2-a-11 沖ノ島を望む沖津宮遙拝所

宗像大社沖津宮遙拝所は、沖ノ島を遙か遠くに拝む生きた伝統を伝える物証である。

沖津宮遙拝所は、沖ノ島から約 48km 離れた大島 (周囲 16.5 km、面積 7.45 km) にある信仰の場である。厳重な禁忌によって通常渡島できない沖ノ島を遠くから拝むために、宗像大社の一部として設けられた。

資産範囲内には遙拝所の名前とともに「寛延三年」(1750年)と刻まれた石碑があり、少なくとも 18世紀中頃までには大島の北側の海辺に沖ノ島の方角を向いて遙拝所が存在したことを示す。現在の社殿は、1933年に建てられたものである。

沖ノ島は島そのものがご神体とされるため、入島は通常禁止されているが、 沖津宮遙拝所はこのような沖ノ島に直接渡ることなく参拝することができる場であ る。晴れて空気の澄みきった日には、ここから水平線上に沖ノ島を望むことがで きる(**写真 2-a-12**)。



写真 2-a-12 沖津宮遙拝所から沖ノ島 を望む



写真 2-a-13 沖津宮遙拝所社殿(正面)



写真 2-a-14 沖津宮遙拝所社殿(内部)

表 2-a-3 宗像大社沖津宮遙拝所関連年表

西曆	事項
1750	石碑に寛延三年(1750年)の年紀があり、この時点で遙拝所の存在したことが分かる。
1784	沖津宮遙拝所社殿の存在を示す初見。
1797	地誌『筑前国続風土記附録』成立。同書所収「大嶋図」に沖ノ島、沖津宮遙拝所が描かれる。
1933	現在の沖津宮遙拝所社殿が再建される。
1971	文化財保護法により「宗像神社境内」の一部として沖津宮遙拝所が国史跡に指定される。
1974	沖津宮遙拝所社殿の修理が行われる。
2014	「国指定史跡宗像神社境内保存管理計画」策定。
2015	沖津宮遙拝所社殿の修理が行われる。
·	

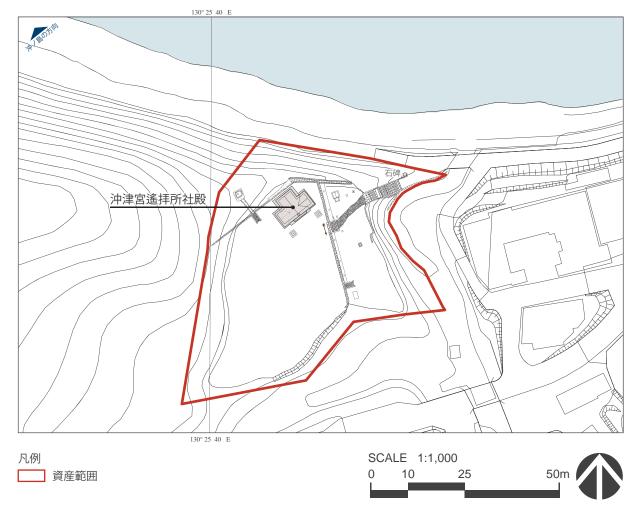


図 2-a-6 宗像大社沖津宮遙拝所平面図

構成資産6:宗像大社中津宮



写真 2-a-15 宗像大社中津宮社殿 露天祭祀は大島で最も高い御嶽山山頂 で行われた。

> 宗像大社中津宮は、沖ノ島祭祀から展開した7世紀から9世紀の古代祭祀 遺跡を源流とし、現代に続く大島の信仰の場である。

> 中津宮は、沖ノ島から約 48km 離れた大島にある。宗像大社を構成する三宮の一つであり、宗像三女神のうち湍津姫神がまつられ、信仰されている。

大島最高峰の御嶽山 (標高 224m) 山頂に御嶽山祭祀遺跡 ⁶ (**写真 2-a-16**) があり、御嶽山の麓に中津宮社殿が建つ (**写真 2-a-15**)。中津宮社殿と御嶽山祭祀遺跡とは御嶽山を登る参道で結ばれ、一体のものとして中津宮を形成する (**写真 2-a-17**)。「中津宮」とは社殿だけでなく、御嶽山祭祀遺跡を中心とする全体を指す。

御嶽山山頂からは、北西方向に沖ノ島 (写真 2-a-18)、南東方向に辺津宮を望むことができ (写真 2-a-19)、沖ノ島と辺津宮を結ぶ直線上に御嶽山祭祀遺跡が位置していることがわかる。御嶽山祭祀遺跡では、7世紀後半から9世紀末頃にかけて露天祭祀が行われ、沖ノ島の露天祭祀遺跡と共通した奉献品が出土している。

その後の時代に、御嶽山の麓には中津宮社殿が建てられ、山頂の祭祀遺跡の地には摂社として御嶽神社が建立されるなど、御嶽神社と中津宮社殿とが並立する現況のような境内が形成されていった。現在の中津宮本殿は、17世紀前半の再建とされている。

6 御嶽山祭祀遺跡は「大島御嶽山 遺跡」としても知られているが、 本推薦では「御嶽山祭祀遺跡」 と表記する。



写真 2-a-16 御嶽山祭祀遺跡 御嶽山山頂にある御嶽山祭祀遺跡から は沖ノ島と九州本土を見渡すことがで きる。

中津宮は、現在の神事においても沖津宮と深い関係を持ち続けている。沖津宮現地大祭の際には、前日から大島に渡り中津宮で神事を行う。また、中世の神事を復興したみあれ祭では、三女神の長姉である沖津宮の田心姫神が沖ノ島から一旦中津宮に迎えられ、ここから湍津姫神とともに本土の末妹、市杵島姫神が待つ辺津宮へ向けて出港する。

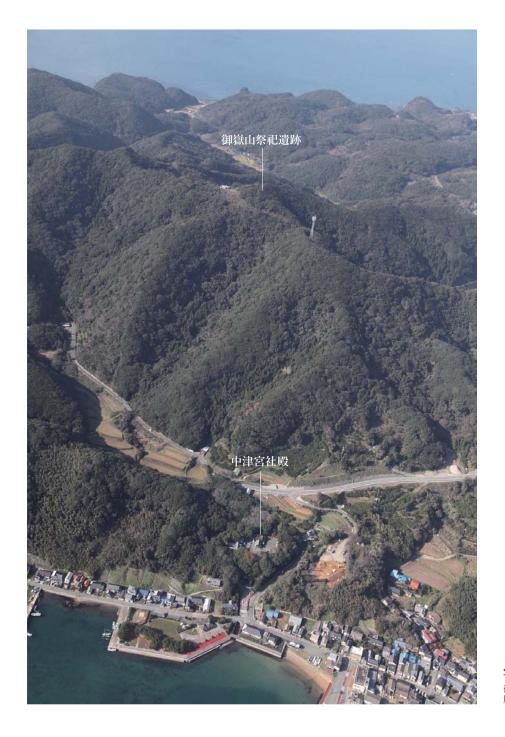


写真 2-a-17 中津宮空撮 御嶽山の麓、海に臨む場所に中津宮社 殿がある。



写真 2-a-18 御嶽山山頂より沖ノ島を望む



写真 2-a-19 御嶽山山頂より九州本土を望む

表 2-a-4 宗像大社中津宮関連年表

事項
御嶽山祭祀遺跡での露天祭祀
『古事記』成立。「中津宮」の名称と宗像三女神神話が記載される。
『日本書紀』成立。「中瀛」の名称と宗像三女神神話が記載される。
中津宮社殿の存在を示す初見。
現在の中津宮本殿が再建される。
地誌『筑前国続風土記附録』成立。同書所収「大嶋図」に中津宮社殿と御嶽神社が参道とと もに描かれる。
現在の中津宮拝殿が再建される。
文化財保護法により「宗像神社境内」として中津宮が国史跡に指定される。
中津宮本殿が福岡県の有形文化財に指定される。
中津宮本殿の解体修理が行われる。
御嶽山祭祀遺跡の発掘調査によって、大島における露天祭祀の存在が確認される。
御嶽山祭祀遺跡が国史跡「宗像神社境内」に追加指定される。
「国指定史跡宗像神社境内保存管理計画」策定。

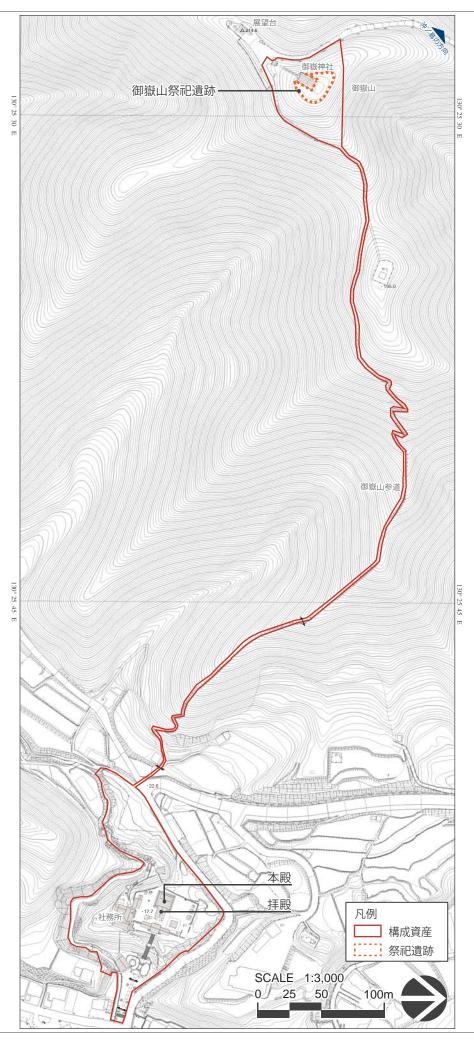


図 2-a-7 宗像大社中津宮平面図

構成資産7:宗像大社辺津宮



写真 2-a-20 宗像大社辺津宮社殿

九州本土では、入海に面した地で沖ノ 島祭祀と同様の露天祭祀が行われた。 現在も宗像大社の中心として多くの参 拝客が訪れている(2014年の修理事 業終了後に撮影)

> 宗像大社辺津宮は、沖ノ島祭祀から展開した7世紀から9世紀の古代祭祀 遺跡を源流とし、現代に続く本土の信仰の場である。

> 辺津宮は、かつて入海であった釣川沿いにある(**写真 2-a-22**)。宗像大社を構成する三宮の一つであり、宗像三女神のうち市杵島姫神がまつられ信仰されており、現在の宗像大社の神事の中心となっている。

釣川を見下ろす宗像山の中腹に古代祭祀の跡である下高宮祭祀遺跡があり、 その麓に社殿が建っている(**写真 2-a-20**)。「辺津宮」とは、社殿だけでなく下高 宮祭祀遺跡を含む信仰の場全体を指す。

この境内で最も高所の宗像山の頂上からは、大島、沖ノ島を望むことができる。現在は宗像大社の神域として立ち入りが禁止されている。下高宮祭祀遺跡は頂上からやや下がった宗像山中腹にある(写真 2-a-23)。沖ノ島露天祭祀遺跡や御嶽山祭祀遺跡から出土した奉献品と共通する土器や滑石製品が数多くみつかっており、辺津宮の社殿成立以前においてここが祭祀の中心的な場であったことを物語る。下高宮祭祀遺跡の一部は高宮祭場(写真 2-a-23)として現在も神事が行われている。

辺津宮においても、沖津宮、中津宮と同様に露天祭祀遺跡から社殿の形成という変遷がみられる。辺津宮社殿は遅くとも12世紀には存在していたことが記録により分かっている。現在の辺津宮本殿は、1557年の焼失後、1578年に最後の大宮司⁷宗像氏貞が再建したものであり、拝殿は1590年に再建されたものである。

7 宗像神社の神主の最高位で、中世においては宗像氏の嫡流が 代々継承し、神社の神事と宗像 地域の政治・軍事を掌った。 辺津宮境内には、かつて第一宮と呼ばれた辺津宮本殿のほかに、第二宮、第三宮といった社殿があり、市杵島姫神とともに沖津宮の田心姫神や中津宮の湍津姫神もまつられている。



写真 2-a-21 現在の宗像大社辺津宮境内



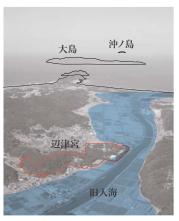


写真 2-a-22 宗像大社辺津宮全景 辺津宮の周辺はかつて入海であった。

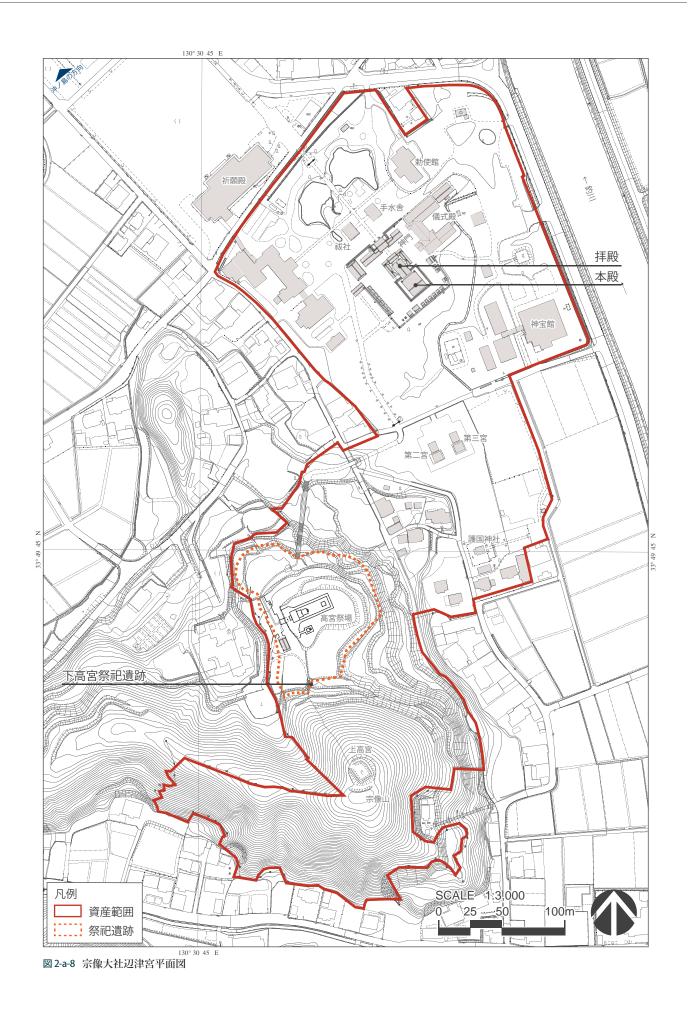


写真 2-a-23 高宮祭場

下高宮祭祀遺跡の一部は、現在祭祀の 場として利用されている。

表 2-a-5 宗像大社辺津宮関連年表

西曆	事項
7世紀後半~9世紀	下高宮祭祀遺跡での露天祭祀
712	『古事記』成立。「辺津宮」の名称と宗像三女神神話が記載される。
720	『日本書紀』成立。「海浜」の名称と宗像三女神神話が記載される。
1119	辺津宮社殿の存在を示す初見。
1201	宋風獅子が辺津宮第三宮に奉納される。第三宮の存在を示す初見。
1241	色定法師坐像が造立される。第一宮の存在を示す初見。
1277	『宗像三所大菩薩御座次第』成立。第二宮の存在を示す初見。
1557	辺津宮第一宮が焼失する。
1578	現在の辺津宮本殿が第一宮本殿として再建される。
1590	現在の辺津宮拝殿が第一宮拝殿として再建される。
$1624 \sim 1644$	「田島宮社頭古絵図」成立。中世の辺津宮境内の様子を伝える最古の境内図。
1675	第3代福岡藩主黒田光之によって、第二宮、第三宮の他、末社75社が本殿の周囲に移される。
1797	地誌『筑前国続風土記附録』成立。同書所収の「宗像宮絵図」は、1675 年以後の境内を描い た最古の絵図。
1907	古社寺保存法により辺津宮本殿、拝殿が特別保護建造物に指定される。
1929	国宝保存法により辺津宮本殿、拝殿が国宝に指定される。
1950	文化財保護法により辺津宮本殿、拝殿が国の重要文化財に指定される。
1969 ~ 1971	辺津宮本殿、拝殿の解体修理が行われる。
1971	文化財保護法により「宗像神社境内」として辺津宮が国史跡に指定される。
1975	第二宮、第三宮が現在地に移転する。
2014	「国指定史跡宗像神社境内保存管理計画」策定。 辺津宮本殿・拝殿の修理が行われる。



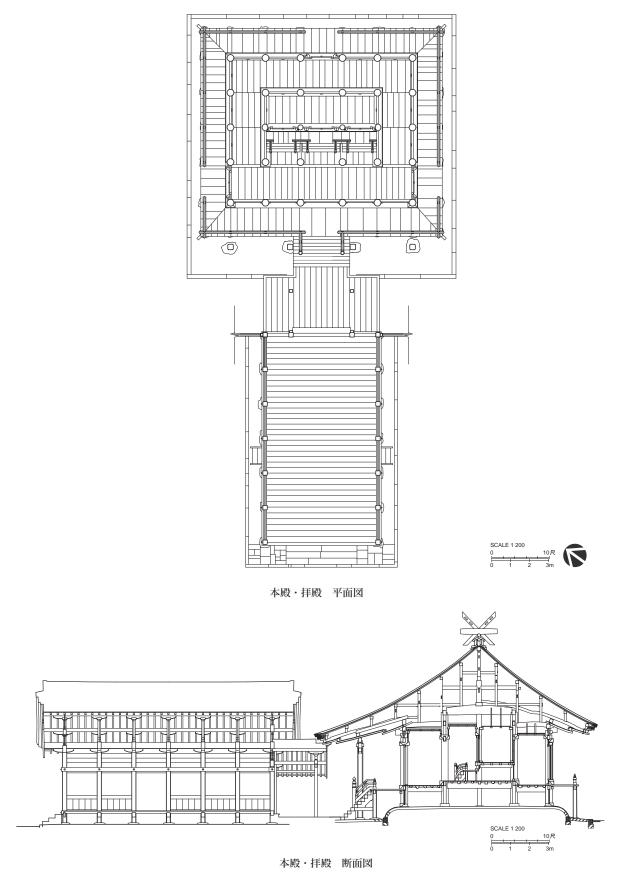


図 2-a-9 宗像大社辺津宮 本殿·拝殿 平断面図

構成資産 8:新原·奴山古墳群



写真 2-a-24 新原・奴山古墳群から大島と海を望む

新原・奴山古墳群は、沖ノ島祭祀を執り行い、沖ノ島を信仰する伝統を継承 した宗像氏の墳墓群である。

本古墳群は、沖ノ島へと続く旧入海を見渡す台地上に位置する。前方後円墳5基、円墳35基、方墳1基の計41基で構成されている。大型の前方後円墳(22号墳、写真2-a-25)と中型の前方後円墳(1号墳)、中型の円墳(20、25号墳、写真2-a-26)は、沖ノ島で岩陰祭祀が始まった5世紀後半に築かれた古墳である。中型の前方後円墳(12、24、30号墳、写真2-a-27)は6世紀前半に築かれた。台地の縁辺部に築かれた小型の円墳群は6世紀後半のものである。

沖ノ島祭祀は、古代国家が深く関与しているため、一地域の祭祀の枠を超えた「国家的祭祀」と位置付けられている。ただし、それは宗像地域の人々の信仰を基礎とするものであり、祭祀を営むにはその海域を支配した宗像氏の協力が不可欠であった。

沖ノ島祭祀が開始される4世紀後半には、釣川中流域にそれまでの古墳とは一線を画す規模である全長64mの前方後円墳である東郷高塚古墳が作られる。5世紀前半には墓域が福津市北部の海岸部へと移動し、旧入海の東側の海を望む台地上に、7世紀中頃までに全長70~100m程度の前方後円墳を含む古墳が連綿と築かれていく。

これらの古墳の中でも、新原・奴山古墳群は、旧入海に面し本土から沖ノ島へと続く海を望む一つの台地上に、5世紀から6世紀という比較的長期にわたって41基の大小さまざまな墳墓が一体的に築かれている。これらの古墳は宗像氏の首長や有力者の墓だとみて疑いない(表 2-a-6 宗像地域の主な古墳の比較表)。



写真 2-a-25 22 号墳



写真 2-a-26 25 号墳



写真 2-a-27 12 号墳



17世紀以降、古墳群に面していた入海は、農地や塩田として利用するため入海が干拓された。また、大型農業施設や国道などの開発に伴って、消失した墳丘、部分的に削平された墳丘も存在するが、沖ノ島へと続く海を望むこの古墳群は地域の人々によって大切に守られ、ほとんどの墳丘は良好な保存状態を保っている。

図 2-a-10 新原・奴山古墳群周辺の旧 入海範囲(上空から)

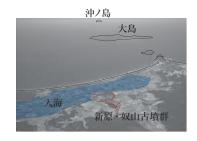




写真 2-a-28 新原・奴山古墳群全景

表 2-a-6 宗像地域の主な古墳の比較表

同時期の沖ノ島祭祀		岩上祭祀		岩陰祭礼	1		半岩陰· 半露天 祭祀	規模
名称	4世紀	5 t	世紀	6 世糸	己	7 1	世紀	
新原・奴山古墳群			1 9	1 1 :				80m (22 号墳)
東郷高塚古墳	2							64 m
勝浦峯ノ畑古墳			2					100 m
勝浦井ノ浦古墳			2					70 m
生家大塚古墳				2				73 m
須多田天降天神社古墳				2				80 m
須多田下ノ口古墳				7	?			82 m
在自剣塚古墳					9			102 m
手光波切不動古墳						•		25 m
宮地嶽古墳						•		35 m

注:前方後円墳は全長、円墳は直径の長さを規模とする。

表 2-a-7 新原·奴山古墳群関連年表

西暦	事項	
1976	県道 (現国道 495 号線) 建設工事に伴い、1~4号墳の発掘調査が行われる。	
1980	宗像農協カントリーエレベーター建設に伴い、5、6号墳が発掘調査の上、消失する。	
1985 ~ 1988	重要遺跡確認調査として墳丘測量を中心とした基礎資料が作成される。	
1989	「調査報告書 新原・奴山古墳群」刊行。	
2005	新原・奴山古墳群が文化財保護法により「津屋崎古墳群」の一部として国史跡に指定される。 以降数度にわたり追加指定される。	
2008	「国指定史跡津屋崎古墳群整備基本構想」策定。	
2011	「国指定史跡津屋崎古墳群整備基本計画」策定。	
2014	「国指定史跡津屋崎古墳群保存管理計画」策定。	

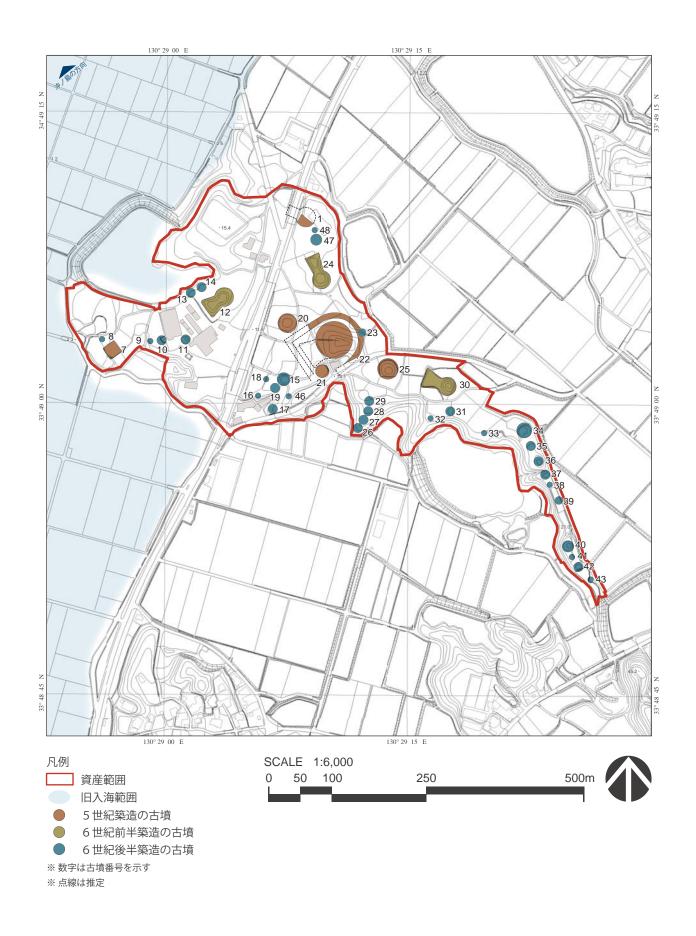


図 2-a-10 新原・奴山古墳群平面図

表 2-a-8 新原·奴山古墳群一覧表

古墳番号	墳形	規模(m)
1	前方後円墳	50	墳長
7	方墳	24	一辺
8	円墳	10	直径
9	円墳	6	直径
10	円墳	12	直径
11	円墳	14	直径
12	前方後円墳	43	墳長
13	円墳	14	直径
14	円墳	14	直径
15	円墳	20	直径
16	円墳	10	直径
17	円墳	11	直径
18	円墳	10	直径
19	円墳	11.5	直径
20	円墳	30	直径
21	円墳	17	直径
22	前方後円墳	80	墳長
23	円墳	12	直径
24	前方後円墳	53.5	墳長
25	円墳	36	直径
26	円墳	17	直径

古墳番号	墳形	規模(m)
27	円墳	15.5	直径
28	円墳	15	直径
29	円墳	12	直径
30	前方後円墳	54	墳長
31	円墳	13	直径
32	円墳	10	直径
33	円墳	8	直径
34	円墳	24	直径
35	円墳	13	直径
36	円墳	17	直径
37	円墳	14	直径
38	円墳	9	直径
39	石室のみ現存		
40	円墳	17	直径
41	円墳	10	直径
42	円墳	11.5	直径
43	円墳	9	直径
46	円墳	7	直径
47	円墳	19	直径
48	円墳	9.5	直径

2.b 歴史と発展

概要

対外交流と沖ノ島信仰 (2.b.1)

国家形成期における日本の古代国家は、航海術に長けた宗像氏の協力を得て対外交流を行い、宗像氏が信仰する沖ノ島で、航海の安全と対外交流の成功を祈願する祭祀を開始する。沖ノ島祭祀遺跡からは貴重な奉献品が多数出土し、祭祀が行われた4世紀後半から9世紀末までの500年にわたって行われた対外交流を証明する(p. 62-63 表 2-b-2 沖ノ島祭祀と対外交流 参照)。

また、沖ノ島での国家的祭祀を担った宗像氏は、 沖ノ島へと続く海を見渡す台地上に新原・奴山古墳 群を築く。この古墳群は、沖ノ島信仰の伝統を伝え てきた宗像地域の人々の存在を今に伝えている。

沖ノ島祭祀 (2.b.2)

4世紀後半から9世紀末まで営まれた沖ノ島祭祀は、四段階の祭祀形態の変遷を辿った。古代祭祀の形態の変遷が確認できる唯一の祭祀遺跡であり、祭祀様式が確立していく過程を500年という長期にわたって追うことができる稀有な存在である。出土した約8万点の奉献品は古代の対外交流を示す奉献品も多数含み、全て国宝に指定されている。沖ノ島は島そのものが信仰の対象として厳重な禁忌で守られてきたことにより、祭祀遺跡やその奉献品が当時の状態で良好に保存されてきた。

三宮と宗像三女神 (2.b.3)

7世紀後半になると、沖ノ島だけではなく、大島や九州本土でも露天祭祀が行われるようになる。祭祀が行われた三つの信仰の場(沖ノ島祭祀遺跡・御嶽山祭祀遺跡・下高宮祭祀遺跡)は、宗像三女神の鎮座する沖津宮、中津宮、辺津宮として、現存する日本最古の歴史書である8世紀初頭成立の『古事記』『日本書紀』に登場する。これら三宮によって現在の宗像大社が構成される。

宗像三女神は、国家による祭祀を受けるべき守護神とされ、国家や有力者による信仰を受け続けた。 宗像三女神をまつる宗像氏も、首長の娘が天皇と婚姻関係を結ぶなど、特別な待遇を受けながら宗像地域を政治と信仰の両面で支配した。

受け継がれる信仰 (2.b.4)

沖ノ島での露天祭祀が終了した後も、三宮において信仰は継続された。10世紀から16世紀に至るまで、宗像氏の嫡流である宗像大宮司家が、宗像神社の神主筆頭として、宗像三女神への信仰を守った。宗像大宮司家は、宗像地域から朝鮮半島へと向かう海を支配し、活発な対外交流によって繁栄を極めた。彼らはまた、海や釣川との関係が深い神事を数多く行った。

その後の時代に三つの信仰の場では社殿が築かれるとともに、神宿る島を遥拝するための場が設けられ、宗像大社の現在の境内が徐々に形成されていった。境内の状況は幾度かの変遷を辿るが、宗像大社全体としては、宗像地域の人々の尽力によってよく守られてきた。厳重な禁忌などの慣習の存在や中世の神事を復興させたみあれ祭などは、その一例である。このように、「神宿る島」に対する信仰は古代から変わることなく続いている。

表 2-b-1 資産関連年表

西曆	事項		
4世紀後半~5 世紀前半	沖ノ島で岩上祭祀が行われる。		
5世紀後半~7 世紀	沖ノ島で岩陰祭祀が行われる。	> 詳細は、p. 62-63 表 2-b-2 沖ノ島 祭祀と対外交流 を参照。	
5世紀~6世紀	新原・奴山古墳群が築造される。		
7世紀後半~8 世紀前半	沖ノ島で半岩陰・半露天祭祀が行われる。		
7世紀後半~9 世紀	御嶽山祭祀遺跡および下高宮祭祀遺跡で露天祭祀が行われる。		
8世紀~9世紀	沖ノ島で露天祭祀が行われる。		
712	『古事記』成立。宗像氏が宗像三女神をまつる「奥津宮」 「中津 話が記載される。	は宮」「辺津宮」の名称と宗像三女神神	
720	『日本書紀』成立。宗像氏が宗像三女神をまつる場として「遠瀛神神話が記載される。	[]「中瀛」「海浜」の名称と宗像三女	
723	これ以前に宗像郡が全国で8つの神郡のうちの一つになる。		
937	『延喜式』に三女神をまつる官社として記載される。		
979	宗像社に大宮司職が設置される。		
1119	辺津宮社殿の存在を示す初見。		
1368	『正平二十三年宗像宮年中行事』成立。宗像社では一年間に 5921 回もの神事が行われ、沖ノ島を訪れる御長手神事が年に四度行われた。		
$1412 \sim 1504$	この間、大宮司家が計 46 回朝鮮へ貿易船を派遣する。		
1429	朝鮮史料『世宗実録』に宗像氏が大島を掌るとある。		
1578	大宮司宗像氏貞が現在の辺津宮本殿を第一宮本殿として再建する。		
1585	中津宮社殿の存在を示す初見。		
1586	大宮司宗像氏貞死去。宗像大宮司家滅亡。		
1590	現在の辺津宮拝殿が第一宮拝殿として再建される。		
1624 ~ 1644	「田島宮社頭古絵図」成立。中世の辺津宮境内の様子を伝える最古の境内図。		
1639	福岡藩が沖ノ島警備のため「島守」を置き、50日交替とする。		
1644	沖津宮社殿の存在を示す初見。		
1675	第3代福岡藩主黒田光之によって、辺津宮の第二宮、第三宮の低	也、末社 75 社が本殿の周囲に移される。	
1682	「御国絵図」成立。沖ノ島を描いた最古の絵図。岩礁も描かれ、「小屋島」「御門柱」と表記される。「御 国絵図」成立。		
1750	沖津宮遙拝所の石碑に寛延三年(1750年)の年紀があり、この時点で遙拝所の存在したことが分かる。		
1794	『瀛津島防人日記』の著者、青柳種信が藩命により沖ノ島守備のため福岡を出発し、大島を経て沖ノ島 に渡る。		
1797	地誌『筑前国続風土記附録』成立。同書所収の「宗像宮絵図」は、1675 年以後の辺津宮境内を描いた最古の絵図。また、同書所収「大嶋図」には中津宮、沖津宮遙拝所と背後に沖ノ島も描かれる。		
1901	宗像神社が官幣大社となる。		
1905	日本海海戦。沖津宮奉仕中の宗像繁丸がこれを望見して、日誌に記述する。		
1942	宗像神社復興期成会創設。		
1954 ~ 1971	3次にわたる沖ノ島祭祀遺跡調査が行われる。		
1962	みあれ祭が復興される。		
1977	社名を「宗像神社」から「宗像大社」に改称する。		

2.b.1 対外交流と沖ノ島信仰

2.b.1.1 宗像地域における支配勢力の誕生

紀元前3世紀頃には日本に稲作文化が伝わって、それまでの狩猟採集から水稲耕作を基盤とした社会へと変化する。農耕の開始は社会の階層化をうみ、それぞれの地域を統括する有力な集団が成長し、やがて「クニ」と呼ばれる初期国家が形成されていった。なかでも活発な対外交流が行われていた九州北部においては、有力な地域勢力が日本の歴史の中でも早くから形成されていた。

宗像地域は、当時は入海であった釣川中流域を中心に農耕集落が発達し、それに伴い支配者層が形成される。彼らは、陸地での稲作農耕に加えて、海上での漁撈活動や対外交流によって勢力を拡大し、沖ノ島を信仰する宗像氏へと成長していく。

4世紀以前の沖ノ島では、人が一時的に滞在した痕跡はみられるものの、4世紀後半以降のような祭祀は未だ行われていなかった。

2.b.1.2 沖ノ島祭祀の起源

宗像氏は、航海の道標となる沖ノ島を信仰していた。

3世紀頃、日本の中央に強大な政治連合であるヤマト王権が登場する。この頃、朝鮮半島では、高句麗、新羅、百済の勢力が拮抗しており、4世紀後半になると、ヤマト王権は百済と友好関係を結び、朝鮮半島に対して直接的に関与するようになる(図2-b-1)。ヤマト王権と高句麗との交戦が記録されている中国吉林省集安市の高句麗好太王碑(414年立碑、写真2-b-1)は、このような東アジアの国際情勢を物語る。ヤマト王権は、対外交流によって中国大陸や朝鮮半島の古代王朝から鉄資源や当時の優れた技術や文化、知識を入手し、その勢力を強大化させていった(図2-b-2)。

ヤマト王権が対外交流を行うためには、日本列島と朝鮮半島との間の海を越える航海術を持つ宗像氏の協力が不可欠であった。宗像氏の協力を得たヤマト王権は、対外交流の航路上にあり、宗像氏が信仰する沖ノ島で祭祀を行うようになる。こうして「国家的祭祀」として始まった沖ノ島祭祀では、質量ともに傑出した奉献品が納められた。そして、宗像氏もまたヤマト王権の対外交流に協力することでその勢力を拡大させていった。



写真 2-b-1 好太王碑 高句麗の好太王(広開土王)を称えた 石碑(414 年立碑)



図 2-b-1 4世紀後半の交流概念図 ヤマト王権が百済との交流を行い、沖 ノ島での祭祀が始まった。



図2-b-2 5世紀の交流概念図 ヤマト王権(倭)は中国南朝に使者を 送った。

2.b.1.3 中央集権国家の成立

6世紀末、中国大陸を隋が統一すると、日本から遣隋使が派遣された。その後隋に代わった唐には、630年に初めての遣唐使が送られている。

しかし、660年、強力な統一王朝となった唐の侵攻により百済が滅亡する。 百済と関係の深かったヤマト王権はその復興を支援して朝鮮半島に出兵したが、 663年、白村江において唐・新羅連合軍に大敗する。この敗戦による深刻な危 機意識はヤマト王権の中央集権化への動きを加速させ、唐にならった体系的な 法典である大宝律令が701年に完成し、中央集権国家である「律令国家」が成 立する。翌702年には数十年ぶりに遣唐使が派遣され、初めて「日本」の国号 を対外的に使用した事例とされる。

その後も、9世紀に至るまで、文化や法制度などを手に入れるため遣唐使や朝鮮半島の新羅への使者の派遣は続き(写真 2-b-2)、沖ノ島のみならず大島や本土でも、数多くの奉献品を用いて祭祀が行われた(図 2-b-3)。



写真 2-b-2 遣唐使船 12 世紀に描かれたもの。



図 2-b-3 8~9世紀の交流概念図 遺唐使が日本に中国文化をもたらし た。

2.b.1.4 沖ノ島祭祀遺跡と新原・奴山古墳群

宗像地域には、当時の先進技術である鉄器や須恵器が発見されるなど、朝鮮半島の影響が認められる。宗像氏がヤマト王権の対外交流に協力し、沖ノ島祭祀を担ったことは、日本で最も古い歴史書である『古事記』『日本書紀』によって証明される(2.b.3.2 参照)。

4世紀後半、沖ノ島で岩上祭祀が始まった時期に、宗像氏は前方後円墳を 釣川流域に築造する。そして沖ノ島祭祀が岩陰祭祀に移行する5世紀後半以降、 墓域を釣川から海岸部に移動させて古墳群を築く。これらの古墳群の中の一つ の古墳からは、沖ノ島祭祀遺跡の21号遺跡(岩上祭祀)出土品と同型の鏡(図 2-b-4)も出土している。

新原・奴山古墳群はこの津屋崎古墳群の一部として、宗像氏が支配した地域の旧入海に臨み、沖ノ島へと続く海を見渡す台地上に密集して築かれた。宗像地域でも数少ない方墳の7号墳(写真2-b-3)からは、沖ノ島祭祀遺跡の出土品と共通した鉄斧(写真2-b-4)が出土している。

沖ノ島へと続く海に面して、5世紀から6世紀にかけて大小様々な古墳が築かれた新原・奴山古墳群は、海を越えた交流に従事し、沖ノ島の祭祀を担った人々の存在を証明するものである。



図2-b-4 津屋崎古墳群出土の鏡片 沖ノ島祭祀遺跡 21 号遺跡出土の画文 帯同向式神獣鏡と同型である。



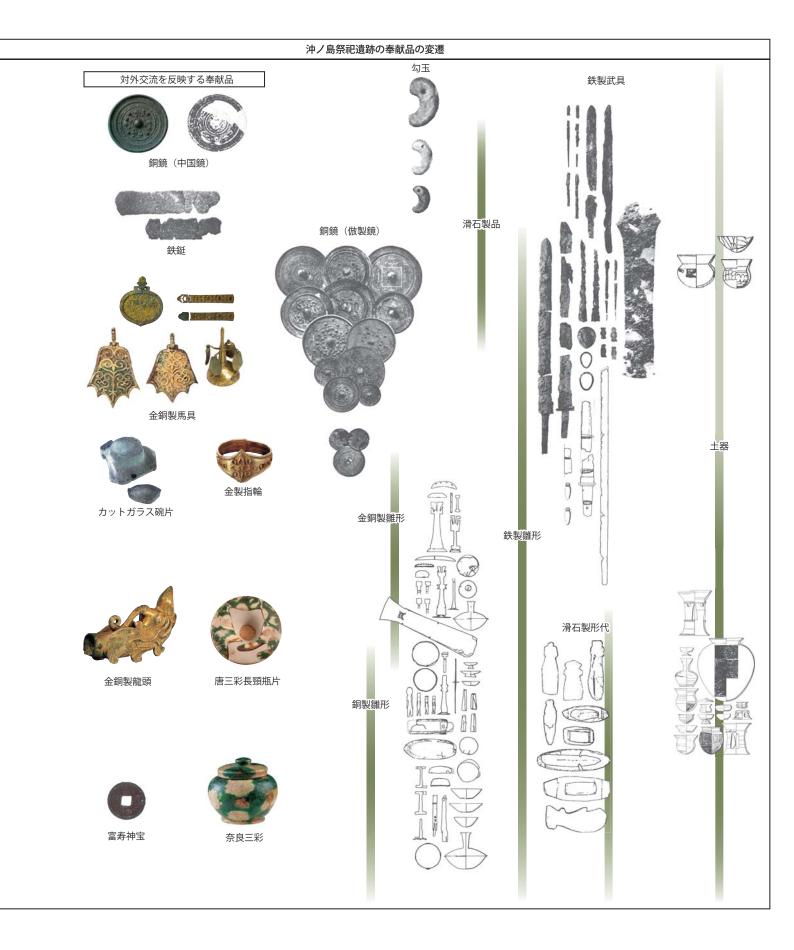


写真 2-b-3 (左) 7 号墳 墳丘の表面には小石が敷き詰められ ている。

写真 2-b-4 (右) 7 号墳出土の鉄斧 同様の物が沖ノ島祭祀遺跡でも発見 されている。

表 2-b-2 沖ノ島祭祀と対外交流

中国		朝無	详半	≟島	日本	西暦	事項	祭祀	形態	構成資産
西晋		高句麗	馬車	京 弁		313	高句麗、朝鮮半島北部の楽浪郡を滅ぼす			
五胡十六国	東晋	I ⊢		折 加	l	369 372	この頃より、朝鮮半島では馬韓から百済が、辰韓から新羅が興る 倭、百済と結び、新羅と交戦 百済王の太子、倭王に七支刀を贈る			
	宋	-			古墳時代	391 421	倭、朝鮮半島に出兵(高句麗好太王碑) 倭王讃、南朝の宋へ入貢する 倭の五王(讃、珍、済、興、武)が宋へ使者を派遣する(478年までに9回派遣)		岩上祭祀	
北魏	斉					478	高句麗、百済を攻撃。百済王は戦死し、首都漢城(ソウル)が陥落する 倭王武、宋の皇帝へ使者を送り、高句麗の脅威から百済を守るための軍事的な援助を求める 加耶四県を百済に割譲			新原。
西魏	梁					512 513 538	加取四宗を日海に割議 百済、倭へ五経博士を贈る 仏教伝来。百済が倭へ仏像と経典を贈る		岩	奴山古墳群築造期
北北周斉	陳					554 562 571 588	新羅、加耶諸国を滅ぼす 遣新羅使 (この後882年までに40回遣使) 百済、倭へ仏僧や技術者を贈る		岩陰祭祀	造期
βį	有					600 602 608 610	初めて遣隋使を派遣する(この後614年までに6回遣使) 百済僧観勒、倭へ暦本、天文地理などを伝える 遣隋使小野妹子が隋の使いとともに帰国し、再び留学生とともに隋に派遣される 高句麗僧が倭に紙、墨、絵具の製法を伝える			
	唐				飛鳥時代	630 654 663 676	初めて遣唐使を派遣する(この後838年までに16回派遣) 胸形君徳善の娘、尼子娘が大海人皇子との間に高市皇子を産む 白村江の戦い(倭、百済の連合軍が唐、新羅の連合軍に大敗) 新羅が、朝鮮半島を統一する		半岩陰	
						701 712 720	大宝律令完成 『古事記』成立 『日本書紀』成立		陰・半露天祭祀	迚
F			統	Ē	奈良時代	723 753	宗像郡が全国八つの神郡のうちの一つとして史料にみえる 中国僧鑑真来日		祀	沖津宮・中津宮・辺津宮での露天祭祀
			一新羅		平安				露天祭祀	辺津宮での露玉
					平安時代	870 878 894	新羅海賊の活動の脅威により、宗像神に対して海上の安全を祈るための使者が朝廷から派遣される 唐への遣使計画が中止される。この頃には、中国や朝鮮半島への遣使は行われなくなる			余 祀



2.b.2 沖ノ島祭祀

2.b.2.1 沖ノ島祭祀の概要とその意義

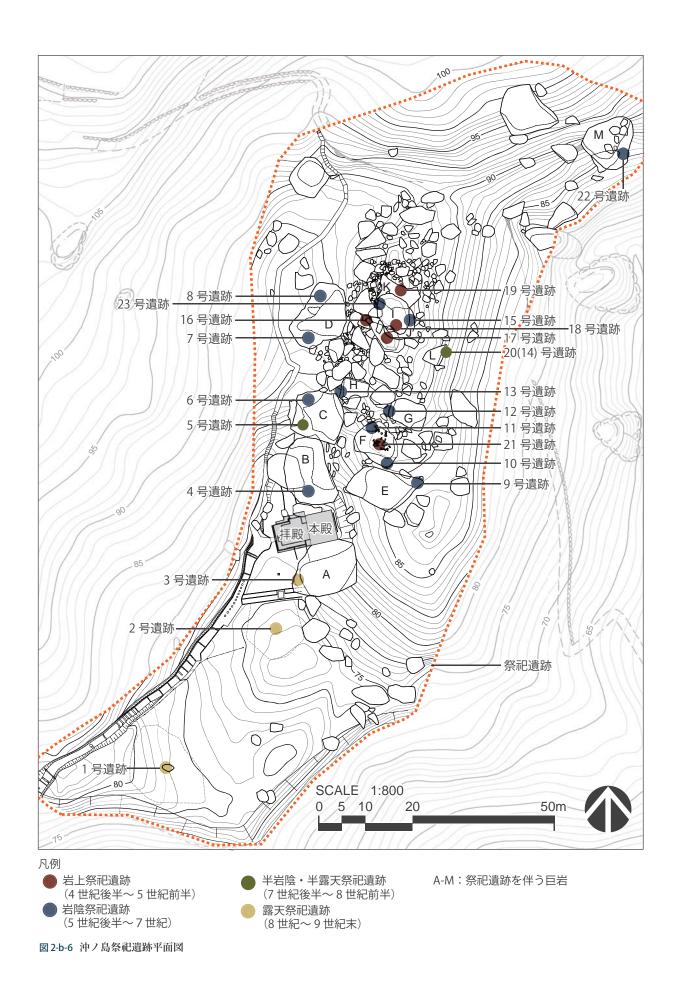
沖ノ島祭祀遺跡は、自然崇拝的な祭祀が500年にわたって徐々に変化し、 最終的に日本固有の信仰である神道へつながる祭祀が確立していく過程を追うこ とができる、唯一の祭祀遺跡である。

4世紀後半から9世紀末まで営まれた沖ノ島祭祀は、岩上一岩陰一半岩陰・ 半露天一露天という四段階の祭祀形態の変遷を辿る。

半岩陰・半露天祭祀遺跡では、律令国家によって確立された神祇祭祀で使用される奉献品も見つかっている。そのため、神道につながる神祇祭祀の先駆的形態を示すものとして、沖ノ島祭祀は高く評価されている。



図 2-b-5 沖ノ島祭祀遺跡と沖津宮社殿の想定復元図 実際は鬱蒼とした森に覆われている。



2.b.2.2 岩上祭祀 (4世紀後半~5世紀前半)

● 岩上祭祀遺跡



4世紀後半、沖ノ島祭祀は、まず、巨岩の上で祭祀が行われる。最初に祭祀が行われた I 号巨岩では、4か所の祭祀遺跡(16、17、18、19号遺跡)が確認されている。

奉献品は、鏡、装身具、武器、工具などで、その中でも特筆すべきは、17 号遺跡 (写真 2-b-5) である。21 面もの鏡が岩と岩との間に奉献されたままの状態で発見され (写真 2-b-6、7、8)、このような多量の鏡が奉献された古代祭祀遺跡の事例は、日本で他に知られていない。そして、17 号遺跡出土鏡の同型鏡や類似鏡がヤマト王権の本拠である近畿地方の古墳から見つかっていることは、岩上祭祀にヤマト王権が関与したことを明瞭に示している。また、中国からもたらされたことが明らかな鏡が 5 面含まれている (写真 2-b-9、10、11)。

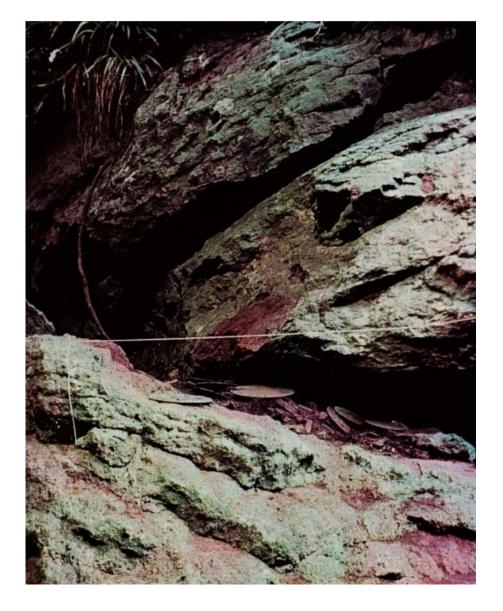


写真 2-b-5 17 号遺跡(1957 年発掘調 査時)

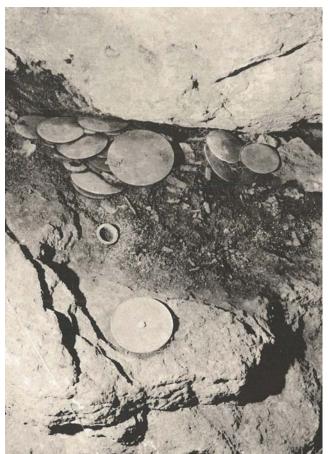


写真 2-b-6 17 号遺跡の奉献品出土状況(上から)



写真 2-b-7 17 号遺跡の鏡出土状況(上から)



写真 2-b-8 17 号遺跡の鏡出土状況(横から)



写真 2-b-9 四神文帯二神二獣鏡(三角縁神獣鏡)

面径 22.2 cm

18 号遺跡出土。鋳上がりの極めて良好な 魏からの舶載鏡とされている。



写真 2-b-10 獣文縁冝子孫銘獣帯鏡

面径 17.6 cm

21 号遺跡出土。中国の六朝時代に後漢形式の鏡が再製作されて、百済を経て日本に伝わったとされる。



写真 2-b-11 画文带同向式神獣鏡

面径 20.7 cm

推定 21 号遺跡出土。5 世紀中葉以降に倭の 五王による南朝への遺使によって入手され た可能性が高い大型鏡。同型の鏡が津屋崎 古墳群中から出土している。

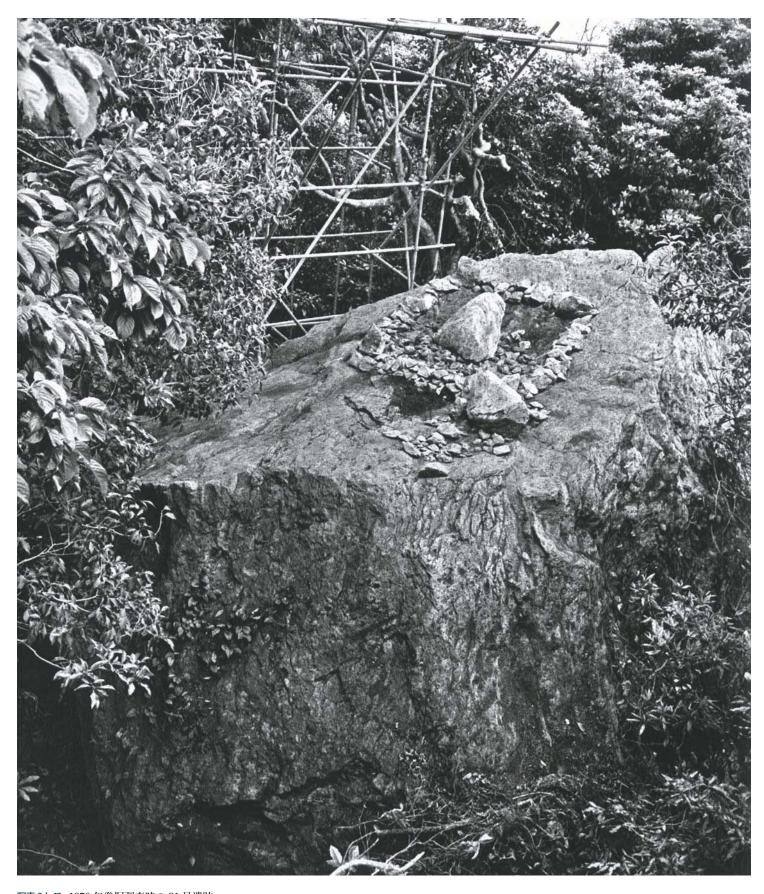


写真 2-b-12 1970 年発掘調査時の 21 号遺跡 発掘調査時に、詳細な検討に基づき、元の位置から移動していた礫を本来の祭壇の形に並べ直した。

5世紀中頃になると、祭祀の場は I 号巨岩から少し南の F 号巨岩の上の 21号遺跡 (写真 2-b-12) へと移る。21号遺跡では祭壇遺構を確認できる。20㎡程の面積がある F 号巨岩上は、その中央部が平坦面となっており、そこに東西南北を四隅として方形状 (2.8m × 2.5m) に礫を並べ、その中央に 1m 程度の大石が位置している (写真 2-b-14)。この遺構は中央の大石に神を降臨させた祭壇であると思われる。

この大石上部の小さなくぼみからは滑石製の臼玉3個が発見された。これらの玉に紐を通して木の枝に掛け、それを大石に立てかけて、神を降臨させたと考えられている。巨岩上においてこのような祭祀が行われたことを確認できる事例は国内で他になく、5世紀頃の日本における祭祀形態を知ることができる稀有な遺跡である。

また、21号遺跡の注目すべき奉献品として鉄鋌 (写真 2-b-13) がある。ヤマト 王権が朝鮮へ進出した理由の一つに鉄資源の確保があり、鉄鋌が出土した事実 は当時の社会においても重要な品が奉献品に用いられていることを示している。

岩上祭祀の奉献品は、4世紀後半から5世紀代にかけての古墳の副葬品と 共通性を持っている。このことから、岩上祭祀は、神に対する祭祀と古墳の被 葬者に対する葬送儀礼とが未分化の段階を物語ると考えられている。ただし、 鏡、玉、剣の組み合わせは、日本の王権の象徴でもある神話にみえる「三種の 神器」と一致し、最も古い段階の祭祀においても後世まで続く要素が既にみら れる。

■ 男上タ記遺跡





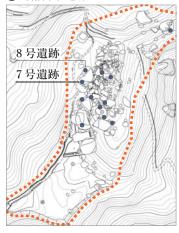
写真 2-b-13 21 号遺跡出土の鉄鋌



写真 2-b-14 21 号遺跡の出土状況

2.b.2.3 岩陰祭祀 (5世紀後半~7世紀)

● 岩陰祭祀遺跡



5世紀後半から7世紀頃になると、巨岩の陰の平らな地表面に奉献品を並べて祭祀が行われた。

D号巨岩南西側にある7号遺跡(写真2-b-15) 出土の金製指輪(写真2-b-18) は、中央に四葉座を持ち、朝鮮半島南東部の新羅の王陵出土のものと酷似している。さらに、装飾的な馬具(写真2-b-19、20、21) など、当時の朝鮮半島における高い水準の技術で作られたものが発見された。また、D号巨岩北西側の8号遺跡から出土した円形浮出文を施したカットグラス碗片(写真2-b-22) は、イランのギラーン地方産とされ、シルクロードを経て新羅を経由して日本に持ち込まれたと考えられている。

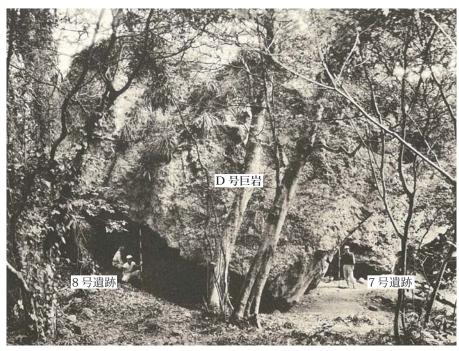


写真 2-b-15 7 号遺跡(右)と 8 号遺跡 (左) (1954 年発掘調査時)





写真 2-b-16 (左) 8 号遺跡の奉献品出 土状況

写真 2-b-17 (右)7 号遺跡の奉献品出 土状況



写真 2-b-18 金製指輪 径 1.8 cm (7 号遺跡) 新羅からもたらされた奉献品。同種の指輪が韓 国慶州の王陵から出土している。



写真 2-b-19 金銅製歩揺付雲珠 高約 10.6 cm(7、8 号遺跡) 馬具の一種。革帯の交差する馬の尻につけられ る金具。新羅からもたらされたもの。



写真 2-b-20 金銅製棘葉形杏葉 長 $13.4 \sim 15.3 \, \mathrm{cm} \, (7 号遺跡)$ 馬具の一種。鞍から胸や尻につなげる革帯にさ げる飾り。新羅からもたらされたもの。



長約9.0 cm (7号遺跡) 7号遺跡から5面出土しており、全て新羅からの舶載品。人面に翼を持った鳥人像と唐草文をからませた透彫が施される。これらの文様は高句麗の古墳の壁画に多くみられる。

写真 2-b-21 金銅製心葉形杏葉





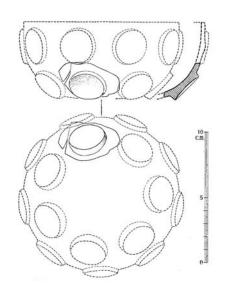


写真 2-b-22 (左上) カットグラス破片

写真 2-b-23 (左下)浮出切子碗(イラン出土)

図 2-b-7 (右) カットグラス碗及び復 元図

カットグラス片二片が8号遺跡から出土した。イランのギーラーン地方、中国の寧夏回族自治区固原県の李賢墓から同種のものが出土しており、ササン朝ペルシアから中国・朝鮮を経て沖ノ島にもたらされたと考えられる。

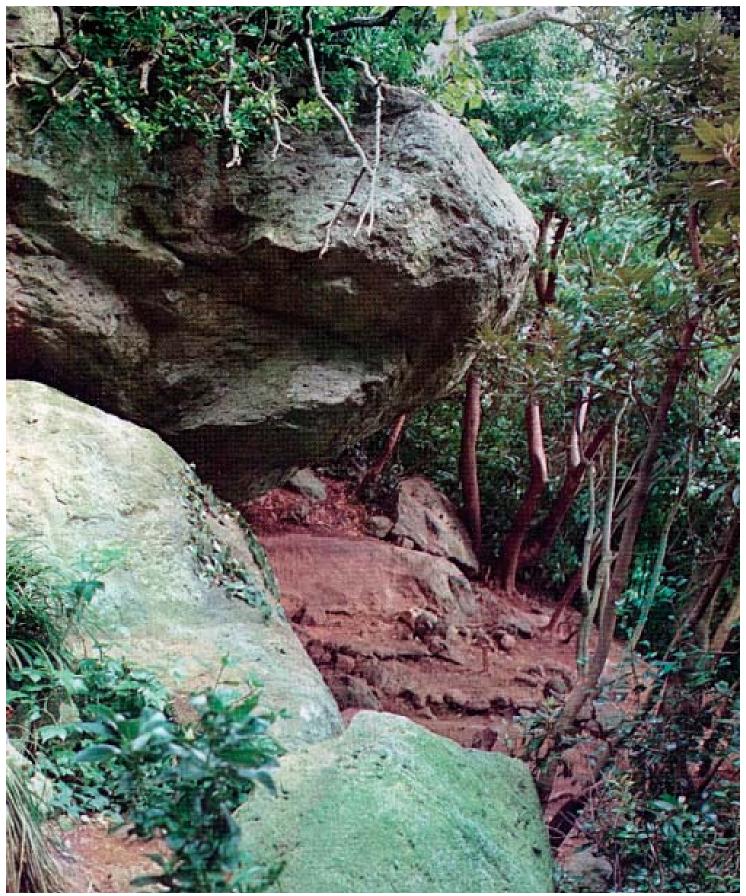


写真 2-b-24 22 号遺跡(1970 年発掘調査時)

7世紀に下ると、C号巨岩の北西側にある6号遺跡や少し離れたM号巨岩の南側にある22号遺跡(写真2-b-24)で祭祀が行われる。これらの遺跡では石を組んで区画した祭壇がみられる。22号遺跡は岩陰に平坦面が少なく、すぐ傾斜地となるので、岩陰いっぱいに祭壇面をつくり、奉献品が並べ置かれていた。

岩陰祭祀の奉献品では新たに馬具が登場する。また、上記の金製指輪や金銅製馬具、鋳造鉄斧など、朝鮮系の奉献品の量が増加し、対外交流によってもたらされた貴重な文物の一部が沖ノ島祭祀に用いられたことを示している。ただし、これらの奉献品は古墳の副葬品と共通するものである。

一方で、7世紀代の6、22号遺跡からは、金銅製雛形紡織具(**写真 2-b-25**)が出土している。金銅製雛形品は半岩陰・半露天祭祀遺跡からも出土しており、岩陰祭祀の終り頃になると、後に日本の古代中央集権国家が確立する祭祀の萌芽がみられるようになる。

● 岩陰祭祀遺跡

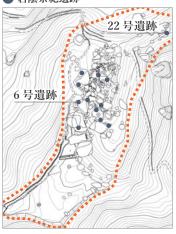




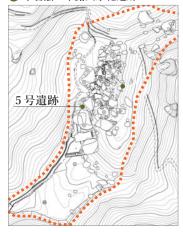


写真 2-b-25 金銅製雛形紡織具

写真 2-b-26 22 号遺跡の奉献品出土 状況

2.b.2.4 半岩陰·半露天祭祀(7世紀後半~8世紀前半)

半岩陰・半露天祭祀遺跡



次の段階の祭祀は、7世紀後半から8世紀前半にかけてわずかな岩陰と大部分の露天との両所にまたがって行われた。遺跡としては、5号遺跡と20号遺跡(14号遺跡)の2遺跡がある。

この時期は唐や新羅への外交使節が往来し、多くの貴重な文物が日本に持ち込まれた。中でも5号遺跡(写真2-b-27)からはこのような交流によってもたらされた奉献品が見つかっている。胴部を竿の先に付け、唇の孔から天蓋や幡を吊り下げるために用いられる金銅製龍頭(写真2-b-28、29)がここで見つかっている。日本での出土例は他になく、使用方法が推定できる点においても非常に珍しい奉献品である。

また、唐三彩は7世紀後半から8世紀中頃に唐で制作された施釉陶器で、5号遺跡から出土した唐三彩長頸瓶片(**写真 2-b-30、31**)は、中国国外で初めて出土した非常に稀少なものである。

この段階になると古墳の副葬品と共通するような奉献品はみられなくなり、祭祀用の土器の重要性が高まってくる(写真 2-b-38)。これは祭祀のための祭具が成立し、葬儀での祭祀との区別がなされたことを示している。ただし、5号遺跡からは、岩陰祭祀の6、22号遺跡と共通する奉献品が多く見つかっているが、同時に後続する露天祭祀と同様の奉献品も見つかっており、半岩陰・半露天祭祀は岩陰祭祀と露天祭祀との過渡期に位置づけられている。

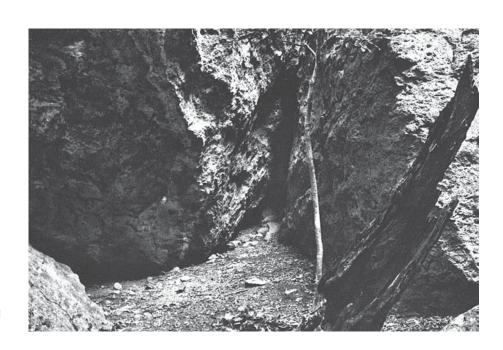


写真 2-b-27 5 号遺跡(1969 年発掘調 査時)



写真 2-b-28 金銅製龍頭出土状況



写真 2-b-29 金銅製龍頭

一対、長 19.5、20.0 cm (5 号遺跡)

敦煌莫高窟の壁画にこれと似たものが描かれ、胴部を竿の先に付け、唇の孔から天蓋や幡を吊り下げるために用いられている。



写真 2-b-30 唐三彩長頸瓶出土状況

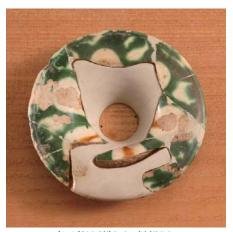


写真 2-b-31 唐三彩長頸瓶 (口縁部分) 口径 8.6 cm (5 号遺跡) 盛唐時代 (7世紀後半) のもので、出土例は世界 的に珍しい。遺唐使によって日本にもたらされた 可能性が高い。



写真2-b-32 唐三彩長頸瓶(完形) 沖ノ島出土の唐三彩片はこのよ うな形が完全形と思われる。



写真 2-b-33 金銅製雛形五弦琴出土状況

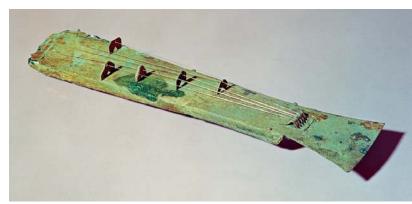


写真 2-b-34 金銅製雛形五弦琴 長 27.1cm (5 号遺跡)

- 8『延喜式』は、10世紀に編纂された法制文書で、律令の施行細目を記したもの。
- 9 伊勢神宮は、日本神話における 最高神で天皇の祖神とされるア マテラスをまつり、日本の神社 の中心とされる神社である。



写真 2-b-35 金銅製雛形紡織具 (5 号遺跡)

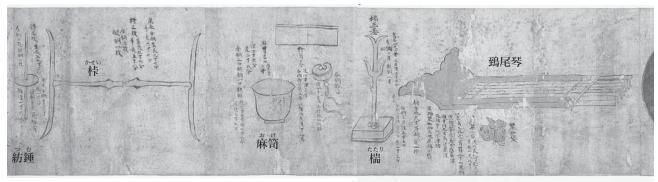


写真 2-b-36 金銅製高機 (伝沖ノ島出土)

4世紀後半、沖ノ島祭祀はヤマト王権が関与した祭祀として始まったが、8世紀初めに中央集権国家である律令国家が成立する中で、その祭祀は「神祇祭祀」として体系化されていく。10世紀成立の『延喜式』8や14世紀成立の『神宮神宝図巻』(写真2-b-37)にみえる伊勢神宮⁹の神宝は、この8世紀以降の神祇祭祀における奉献品を表すものである。5号遺跡出土の金銅製雛形五弦琴(写真2-b-33、34)は、『延喜式』に記載されている伊勢神宮神宝の「鵄尾琴」と共通し、『神宮神宝図巻』に描かれた伊勢神宮神宝の琴にも類似している。

また、同遺跡で発見された金銅製雛形紡織具 (写真 2-b-35)・金銅製高機 (写真 2-b-36) なども『延喜式』、『神宮神宝図巻』の神宝、祭祀品と共通するものである。神祇祭祀に由来する伊勢神宮の神宝と7世紀の沖ノ島祭祀 (岩陰祭祀および半岩陰・半露天祭祀) の奉献品とに共通するものが見え始めることは、沖ノ島祭祀が後の神祇祭祀に組み入れられる先駆的な要素をもっていたことを示している。

このように、自然崇拝に基づいて始まった沖ノ島祭祀において、律令国家に よる神祇祭祀の要素が確認できるという点で、半岩陰・半露天祭祀は重要な画 期である。



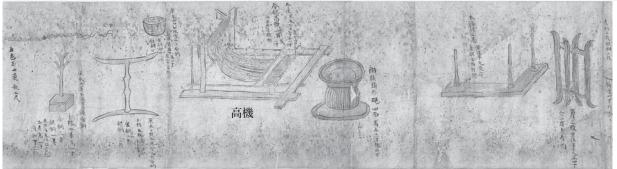
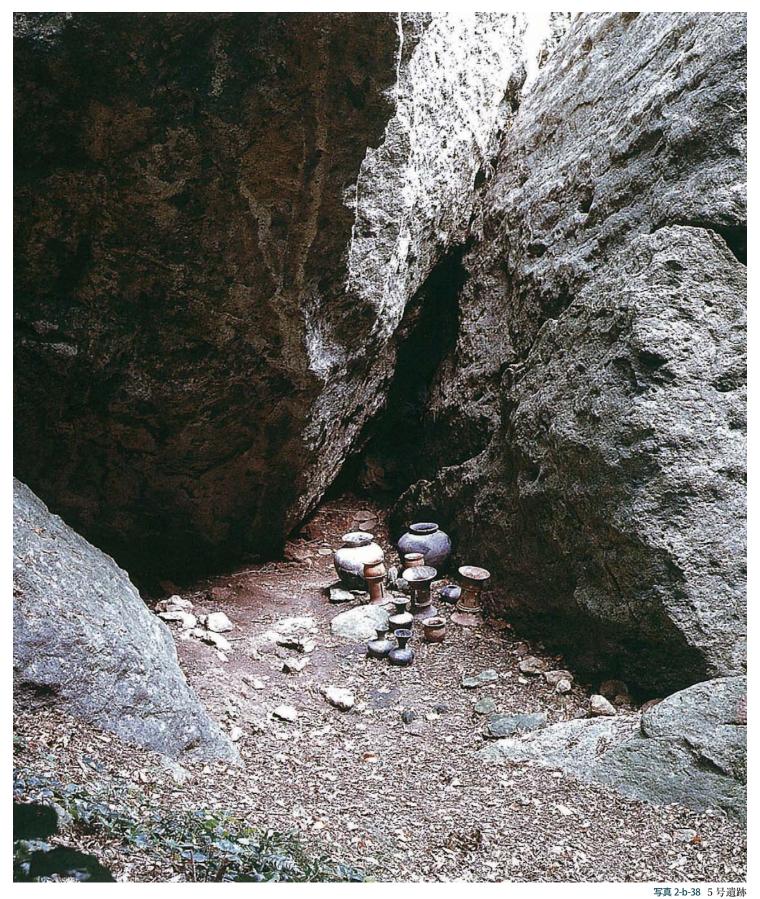


写真 2-b-37 『神宮神宝図巻』(部分)

2巻のうちの1巻で、1410年に書写されたもの。神祇祭祀が成立した後の伊勢神宮の41の神宝が描かれる。沖ノ島祭祀で奉献された五弦琴や紡織具などはここに描かれる神宝と一致し、半岩陰・半露天祭祀が神祇祭祀の先駆的形態を示すと考えられている。



発掘調査時、出土した土器を復元し、原位置に再配置したもの

2.b.2.5 露天祭祀 (8世紀~9世紀末)

● 露天祭祀遺跡



8世紀になると、それまで祭祀の場であった巨岩群から南西に約30m離れた平坦地で祭祀が行われるようになり、これが四段階の祭祀形態の変遷において最後の段階である。1、2、3号遺跡の3箇所の露天祭祀遺跡があり、1号遺跡の一部だけが考古学的に調査されている(写真2-b-39)。

1号遺跡の東南隅に縦 1.6m、横 1.4m の大石があり、これを中心に十字のトレンチを設定して調査が行われた。この調査によって、大石に連なって 20cm 前後の大きさの角礫で形成された石積の祭壇遺構が見つかった。

奉献品は、多種多様な土器を始めとして、唐三彩の技術をもとに日本で作られた奈良三彩有蓋小壺 (写真 2-b-43、44)、滑石製人形・馬形・舟形 (写真 2-b-40、41、42) や滑石製玉類、有孔土器 (写真 2-b-45)、金属製雛形品、紡織具などが出土している。これらの奉献品は、出土数の上でも他の祭祀遺跡を圧倒しており、1 号遺跡においては何度も繰り返し祭祀が行われたことを示している。こうした継続的な祭祀による奉献品の集積が1号遺跡である。



写真 2-b-39 1 号遺跡(1970 年発掘調査時)

特に、818 年初鋳の富寿神宝 (**写真 2-b-46、47**) や8世紀から9世紀に位置づけられる奈良三彩有蓋小壺は、中央からもたらされたものと考えられる。これらの奉献品の出土によって、1号遺跡も律令国家の関与のもとで行われた祭祀であり、沖ノ島における「国家的祭祀」が9世紀末まで継続したことが証明される。

また、出土したおびただしい土器類は、半岩陰・半露天祭祀段階から発展したもので、器形が細分化したほぼすべての器種を網羅している。『延喜式』に記載された各種の土器と対応することから、神祇祭祀で使用された土器であることがわかる。一方で、孔の開いた祭祀専用の土器や滑石製の人形、馬形、舟形などの形代は、宗像地域でしかみられない奉献品であり、宗像地域の祭祀が沖ノ島の「国家的祭祀」の展開の基礎にあったことを示す。

なお、古代祭祀終了後の時期の土師皿のみが集積する場所が、1号遺跡の 南側の海に面した崖の際などに確認されている。これは、古代以後も沖ノ島での 祭祀が続けられていたことを示している。



写真 2-b-40 滑石製人形 滑石の両側に二箇所ずつ刻みを入れ、 頭、胴、足を表わす。



写真 2-b-41 滑石製馬形 馬の側面を表現したもの。



写真 2-b-42 滑石製舟形 舟形は 1 号遺跡出土の滑石製形代の中 で最も数が多く、形態も多様である。



写真 2-b-43 奈良三彩小壺出土状況



写真 2-b-44 奈良三彩有蓋小壺 高 4.7 cm 日本の中央でつくられたものであり、素地に緑 釉を鹿ノ子状にかけている。



写真 2-b-45 有孔土器 有孔土器は、儀式用に作られた沖ノ島 祭祀独特のものである。



写真 2-b-46 富寿神宝出土状況



写真 2-b-47 富寿神宝 径 2.2 cm 中国の貨幣制度に倣い、律令国家が発行した銅 銭の一つ。818 年初鋳。

2.b.3 三宮と宗像三女神

2.b.3.1 三つの祭祀遺跡



写真 2-b-48 御嶽山祭祀遺跡 (調査時)



奈良三彩



滑石製舟形



^{再石表品} 写真 2-b-49 御嶽山祭祀遺跡出土の奉 献品



滑石製舟形



^{用石製玉類} 写真 2-b-50 下高宮祭祀遺跡出土の奉 献品

日本の古代国家の中央集権化と並行して、現存する日本最古の歴史書である『古事記』(712 年成立、**写真 2-b-51**)、『日本書紀』(720 年成立、**写真 2-b-52**)が8世紀前半に編纂された。『古事記』『日本書紀』には、宗像地域の三つの露天祭祀の場の名称が登場する。

8世紀以降、沖ノ島では露天祭祀が行われる。『古事記』『日本書紀』に記された「奥津宮」「遠瀛」は、沖ノ島祭祀遺跡を中心とした信仰の場を指している。さらに、沖ノ島露天祭祀と同じ時期に、大島と九州本土でも沖ノ島と同様の露天祭祀が営まれるようになる。

大島で最も高く、沖ノ島と九州本土の辺津宮とを同時に見渡せる御嶽山山頂に御嶽山祭祀遺跡がある(写真 2-b-48)。御嶽山祭祀遺跡は、7世紀後半から9世紀末頃の露天の祭祀遺跡で、様々な土器をはじめ、奈良三彩有蓋小壺や滑石製の人形・馬形・舟形、滑石製玉類など沖ノ島露天祭祀遺跡と共通した奉献品が出土している(写真 2-b-49)。『古事記』『日本書紀』の「中津宮」「中瀛」は、御嶽山祭祀遺跡を中心とする信仰の場を指している。

九州本土、釣川に面した宗像山の中腹の下高宮祭祀遺跡からも、沖ノ島露天祭祀遺跡や御嶽山祭祀遺跡と共通する露天祭祀の奉献品(**写真 2-b-50**)が発見されている。『古事記』『日本書紀』の「辺津宮」「海浜」もまた、下高宮祭祀遺跡を中心とする信仰の場を指している。

このように、7世紀後半になると、沖ノ島祭祀遺跡、御嶽山祭祀遺跡、下高宮祭祀遺跡それぞれで露天祭祀が営まれるようになる。そして、露天祭祀が行われたこれら3箇所の祭祀遺跡を中心とする信仰の場は、『古事記』『日本書紀』の神話に、「奥津宮」「遠瀛」、「中津宮」「中瀛」、「辺津宮」「海浜」として登場する(写真2-b-51、52)。この段階において、考古遺跡と文献の両方から、三つの宮が成立したことが明らかとなる。さらに、『古事記』『日本書紀』には、三つの場に祭られる神として宗像三女神(田心姫神、湍津姫神、市杵島姫神)という人格神が登場する。これは、岩上祭祀から露天祭祀に変遷する過程で、自然崇拝から人格神への信仰が形成されたことを意味している。

これら三宮からなる宗像神社は、『延喜式』(p.76 註 8 参照) にも記載され、 国家の中でも格式の高い神社として今日に信仰が継続されていく。



写真 2-b-51 『古事記』

現存する日本最古の歴史書。712 年成立。写真は 1371 ~ 1372 年の写本。三つの宮の名称と宗像三女神の誕生が記される。赤枠の箇所には「故、其の、先づ生める神、多紀理毘売命は、胸形の奥津宮に坐す。次に、市寸島比売命は、胸形の中津宮に坐す。次に、田寸津比売命は、胸形の辺津宮に坐す。此の三柱の神は、胸形君等が以ちいつく三前の大神ぞ。」とある。



写真 2-b-52 『日本書紀』

日本最古の正史。720 年成立。アマテラスとスサノヲとのウケヒ(誓約)の箇所である。写真は 1817 年の版本(宗像大社所蔵)。

2.b.3.2 宗像三女神と宗像氏

三宮にまつられた宗像三女神は、日本列島と朝鮮半島を結ぶ海域の交通を 掌る存在として、『古事記』『日本書紀』の神話のなかで高く位置づけられてい る。

『古事記』『日本書紀』の神話には次のようにある。

皇祖神アマテラスの弟スサノヲは黄泉の国へ行くように命じられたため、暇乞いをしにアマテラスが支配する高天原へと向かった。しかし、アマテラスから国を奪いに来たと疑われてしまう。そこで、スサノヲは身の潔白を証明するために、子を生み正邪を占うウケヒ(誓約)を提案した。自分の生んだ子が女であれば邪心があり、男であれば潔白であるというのである。

これに同意したアマテラスはスサノヲの剣を三つに折り、井戸ですすぎ、 噛み砕いて口から吹き棄てた。その息吹の霧の中から田心姫神・湍津姫 神・市杵嶋姫神の宗像三女神が生まれた。

日本神話において宗像三女神はまた、「海北道中」の「道主責」、つまり宗像地域から朝鮮半島へ向かう海域を守る神とされる。さらに、天皇の祖神であるアマテラスから「天孫を助け奉りて、天孫のために祭られよ」との命(神勅、写真2-b-53)を受けたように、国家を守護し、かつ国家による祭祀を通して尊崇を受けるべき神として位置づけられている。

日本神話に登場する神々の多くは、各地の豪族がまつっていた地方の神が中央集権国家の神話に取り入れられ、体系化されたものと考えられている。宗像



写真 2-b-53 三宮の拝殿にかけられる 御神勅扁額

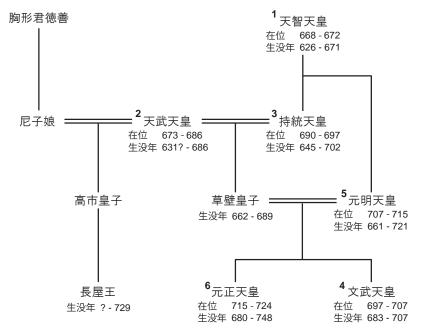


図2-b-8 宗像氏と天皇家の系図(数字は皇位継承順)

三女神も元来は宗像地域の人々がまつっていた神であったが、対外交流の重要な航路となる海域を守る神として、アマテラスと結びつく国家にとって非常に重要な神とされた。

さらに神話には、宗像氏が宗像三女神をまつる存在として記されている。宗像氏の中で歴史上初めて名前が判明するのが、7世紀の胸形君徳善という人物である。徳善は地方豪族ながら、娘の尼子娘が天武天皇(631~636年)と婚姻し、高市皇子(長屋王の父)を産んでいることは特筆すべきことである(図2-b-8)。その天武天皇の治世に再編された氏姓制度において、宗像氏は「朝臣」という高い地位を賜与される。律令国家の地方制度では、国家にとって特に重要な神社の所在する地域が「神郡」となったが、宗像地域は全国で約600ある郡のうち八つしか存在しなかった「神郡」の一つとされた。そのなかでも8世紀の宗像氏の首長は、代々、宗像郡の行政の長官と、宗像神に対する祭祀を掌る神主とを兼任するなど、非常に特別な待遇を受けていた。

宗像地域とそこから朝鮮半島へと向かう海域を支配下におさめ、宗像三女神をまつった宗像氏は、政治と信仰の両面で宗像地域を支配していた。そして、それは新しい中央集権国家との強い結びつきの下で実現していた。沖ノ島祭祀及び宗像三女神に対する祭祀は、宗像地域のための祭祀であり、同時に国家のための祭祀でもあるという重層性をもって行われていたのである。

2.b.3.3 古代祭祀終了以降の沖ノ島

9世末頃には、遣唐使や新羅への公的な使節の派遣は途絶え、沖ノ島祭祀 遺跡、御嶽山祭祀遺跡、下高宮祭祀遺跡で行われていた露天祭祀も終焉を迎 える。その理由については、対外使節の派遣停止や国家による祭祀のあり方の 変容などが考えられる。

しかし、経済・文化面での対外交流はその後も継続し、古代祭祀が行われなくなった後も宗像三女神と宗像氏は国家の中で高い地位を保持し続けた。この要因としては、9世紀以降国家権力を掌握した藤原氏の平安京の邸内に宗像神が勧請され、篤い尊崇を受けたことが挙げられる(写真 2-b-54)。新羅海賊の活動が脅威となった870年、878年には宗像神に対しても朝廷から使者が派遣され、海上の安全が祈願されている。



写真 2-b-54 京都御苑内の宗像神社

2.b.4 受け継がれる信仰

2.b.4.1 宗像大宮司家と対外交流

10 本推薦では、日本の「中世」を 12~16 世紀とする。





写真 2-b-55 宋風獅子 阿形、吽形ともに、1201 年に辺津宮 第三宮に奉納されたことを記す背銘が 刻まれている。第三宮の確実な初見史 料でもある。

宗像三女神信仰は、10世紀以降、宗像氏の嫡流である宗像大宮司家に引き継がれる。979年に宗像氏能が大宮司職に任命されて以降、宗像氏の嫡流が中世¹⁰を通じて大宮司職を継承し、宗像神社の神事を担った。宗像大宮司家は、古代の宗像氏と同様、宗像地域と朝鮮半島へと向かう海を掌握し、東アジア海域での活発な交易により繁栄を極めた(図 2-b-9)。

13世紀の大宮司家は南宋商人と二代にわたる婚姻関係を結び、中には宋人を母に持つ大宮司もいた。宗像大社には当時の対外交流の証拠となる文化財が残されている。1201年に辺津宮の第三宮に奉納された一対の宋風獅子(写真2-b-55)は、宋で作られて日本へもたらされたものである。また、社僧色定法師が書写した一筆一切経(写真2-b-56)は、中国人船頭が後援し、作成されたものである。さらに、宗像地域には「唐坊」(外国人の居留地の意)という地名が現福津市在自字唐防地にあり、在自西ノ後遺跡(写真2-b-57)の発掘調査によってこの付近が中国人居住地であることが判明している。他に、宋から請来された阿弥陀経石(写真2-b-58)や宋の作風と関わりの深い色定法師坐像(写真2-b-59)など、宋との強い結びつきを示すものがある。これらの文化財は、大宮司家が九州北西部から朝鮮半島へと向かう海を掌握し、宋との交流に中心的役割を





写真 2-b-56 一筆一切経 社僧色定が 1187 ~ 1227 年にかけて 写経した一切経(大蔵経)。4342 巻が 一括して重要文化財に指定されている。



写真 2-b-57 在自西ノ後遺跡 白磁、青磁など中国との交流 を示す遺物が検出された。中 国商人の居住の痕跡を示して いる。



写真 2-b-58 阿弥陀経石 1195 年、大宮司宗像氏国が父の 供養のため南宋に求めたもの。 正面に阿弥陀仏坐像、裏に阿弥 陀経が彫られている。



写真 2-b-59 色定法師坐像 1241 年造立。辺津宮の西南にある興聖寺に伝わる。背銘から、色 定はこの像が完成した翌年に 84 歳で亡くなったことが分かる。

果たしていたことを今に伝えている。大宮司家は、浦や島の海産物の勝手な徴収を禁止するなど(**写真 2-b-60**)、海を直接支配しており、対外交渉と信仰を介して強大な勢力を誇っていたのである。

14世紀~16世紀になると、大宮司家と朝鮮との交流が頻繁になる。朝鮮側の史料に宗像氏が大島を本拠とする海賊を掌握しているとの記載があり、朝鮮側にも宗像氏の力が知られていたことがわかる。大宮司家は、1412年から1504年の92年間に、計46回朝鮮へ貿易船を出している。

こうして、宗像大宮司家は、16世紀まで宗像地域と朝鮮半島へ向かう海を支配した。しかし、1586年、大宮司宗像氏貞が跡継ぎなく病没してしまったことにより、大宮司家は断絶する。これにより氏貞の旧臣の多くは神職としての地位を失い、社領や祭礼の数・規模などは大きく縮小してしまう。しかし、辺津宮では大宮司家代々の文書を伝える家など12の社家¹¹が、沖津宮、中津宮では大島に居住する一甲斐河野家・二甲斐河野(越智)家がそれぞれ神事を担い、沖ノ島や宗像三女神への信仰を守っていった。



写真 2-b-60 宗像氏盛事書案

1313 年、前大宮司宗像氏盛が、大宮司を譲ったばかりの幼い息子に書き残した家訓。15 箇条からなる。宗像地域の浦・島・山に対する大宮司家の強力な支配が窺われる。

11 宗像神社の神職の一族で、大 宮司家の家臣であった。大宮司 家滅亡後の宗像神社の神事を 担った。



図 2-b-9 中世の対外交流概念図

宗像大宮司家は中世を通じて宗像地域 から朝鮮へ向かう海域を支配し、東アジ アにおける海を介した交流に従事した。



写真 2-b-61 『正平二十三年宗像宮年中行事』

宗像神社の各施設における一年ごとの神事の名称を書き上げた史料。1368年成立。一年に5921回の神事が行われたことが記されている。

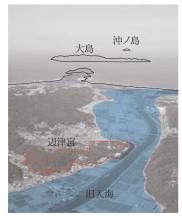


図 2-b-10 辺津宮周辺の旧入海範囲

2.b.4.2 宗像神社の神事

宗像神社では、辺津宮を三宮の神事の中心として信仰が継続していった。中世は宗像神社の最盛期で、宗像郡内には 75 の末社が存在し、一年に本社、末社合わせて 5921 回の神事が行われたという (写真 2-b-61)。辺津宮境内の東を流れる釣川はかつては入り海であり、宗像神社の神事は海や釣川との関係性の深さが特徴となっている (図 2-b-10)。

放生会(8月13~15日)の中で行われる「船闘神事」は最大の神事の一つであり、神輿を載せた神船を釣川で競漕させる神事である。五隻の神船は、宗像郡内の漁村から供進されることになっており、釣川や海と宗像神社との関係を示す神事として特徴的なものである。

海との深いつながりから生まれた沖ノ島及び宗像三女神への信仰は、中世から近代へと水にかかわる神事として受け継がれていった。毎年 12 月 19 日に辺津宮では、航海の安全を祈り、山の神へ感謝を捧げる嶽祭が行われ、大島の御嶽山でも同様の神事が行われていた。また、12 月 25 日に辺津宮の上高宮で行われた八女神事では、中津宮の末社から酒肴が献上され、大島在住の沖ノ島神主と大島神主が参向し、大島の神人によって神楽が奉納された。さらに、沖ノ島での御長手神事は、長い竹に布を付したものを神の象徴として辺津宮に迎える祭祀で、春夏秋冬四回行われ、この竹は沖ノ島から調達された。四季のうち春夏秋の3回は、辺津宮でも「大祭」が催されるが、その際の沖ノ島での御長手神事は、辺津宮での大祭終了後に大島の神主が沖ノ島に渡島して行ったものである。このように、三宮ではそれぞれで神事が執行されるとともに、海を介した広大な空間の中で三宮が一体となった神事も行われた。

2.b.4.3 三宮の境内の形成

古代からの三つの信仰の場において祭祀が継続し、やがて祭祀遺跡の近くに 社殿が築かれる。

沖ノ島は、9世紀末に古代祭祀が終焉を迎えたあとも、島そのものが信仰の対象であり続けた。古代祭祀終焉以降、本格的な社殿がない状態が長く続いていたが、1644年に沖津宮の遷宮が行われた記録があり、おそくとも17世紀半ば以前には現在の場所に社殿が造営されていたことを示す。現在の沖津宮社殿は1932年に再建されたもので(写真2-b-65)、宗像三女神のうち田心姫神がまつられている。

大宮司家滅亡後、沖津宮の神事は一甲斐河野氏が担うことになったが、平常は大島に在住しており、渡島が困難な沖ノ島を拝むための場所として沖津宮遙拝所が大島の北部に設置された。遙拝所の名前が刻まれた石碑(写真 2-b-62)に「寛延三年」(1750年)とあり、遅くとも18世紀半ばまでには沖津宮遙拝所が存在していた。現在の遙拝所社殿は1933年に建てられたものである(写真 2-b-63、69)。

中津宮では、遅くとも 13 世紀末から 14 世紀前半頃には社殿が建てられていたと推測できる。史料から 1556 年には御嶽神社の存在が確認され (写真 2-b-64)、さらに、1585 年には社殿の灯明を護る役が設けられており、遅くとも 16 世紀末までには社殿を伴う現在の中津宮の境内に近い状況が窺われる (写真 2-b-71)。現在の中津宮本殿は、17 世紀前半頃の建築とみられており、宗像三女神のうち湍津姫神がまつられている (写真 2-b-66)。

辺津宮では、8世紀段階で社殿が存在していたという伝承もあるが、12世紀初めの社殿の焼失後の再建を記した記事が確実な初見史料である。13世紀には、第一宮(本殿)、第二宮、第三宮、上高宮、下高宮といった現在に通じる境内施設を確認できる。これらは、中世の辺津宮における主要な施設であり、市杵島姫神とともに沖津宮の田心姫神、中津宮の湍津姫神をまつることで、宗像三女神に対する神事の中心となっていた。辺津宮境内を描く現存する最も古い絵図が田島宮社頭古絵図(写真 2-b-70)で、これにより中世の境内の状況を知ることができる。



写真 2-b-62 沖津宮遙拝所石碑 沖津宮遙拝所の存在を示す初見史料の 一つである。



写真 2-b-63 沖津宮遙拝所社殿



写真 2-b-64 『宗像大菩薩御縁起』 日本神話との関係を通して宗像神の地位と神徳を説明した書物。13 世紀末から14 世紀前半頃成立。中津宮の末 社が記されていることから、この時ま

位と仲徳を記明した書物。13 世紀木から 14 世紀前半頃成立。中津宮の末社が記されていることから、この時までは中津宮本社の社殿が建てられていたと推測できる。



写真 2-b-65 沖津宮社殿



写真 2-b-66 中津宮社殿



写真 2-a-67 辺津宮社殿



写真 2-b-68 大宮司宗像氏貞(1545 ~ 1586)

焼失した辺津宮本殿を再建するなど、 宗像神社と大宮司家の発展に貢献し た。嫡子がなかったため、氏貞の死去 により大宮司家は滅亡することになる。 1557年、火災により第一宮が焼失してしまうが、1578年に大宮司宗像氏貞(**写真 2-b-68**)が本殿を、さらに 1590年に領主小早川隆景が拝殿を再建する。現在残る辺津宮本殿及び拝殿はこの時再建した第一宮であり、ともに国の重要文化財に指定され、宗像三女神のうち市杵島姫神がまつられている(**写真 2-b-67**)。

その後、1675 年、福岡藩主黒田光之によって、第二宮、第三宮、上高宮、下高宮などの末社 75 社が本殿の周囲へ移転され、神社境内は現況に近いものとなった (写真 2-b-72)。現在に至るまで幾度かの修理はあったが、この 1675 年時のものとみられる末社も幾つか現存している。

19世紀後半に新馬場の出現や末社の配置換えなど境内域の小さな変更はあったものの、全体としてはそれ以前の状況を引き継いでいる。現況に至る大きな変化としては、1917年の小池の消滅、昭和期(1925~1989年)の境内地拡張が挙げられる。この拡張した境内域を中心に、下高宮祭祀遺跡での整備、本殿、拝殿の修理、第二宮、第三宮の再移転、諸施設の建設等が行われ、現在の辺津宮境内が形成された。

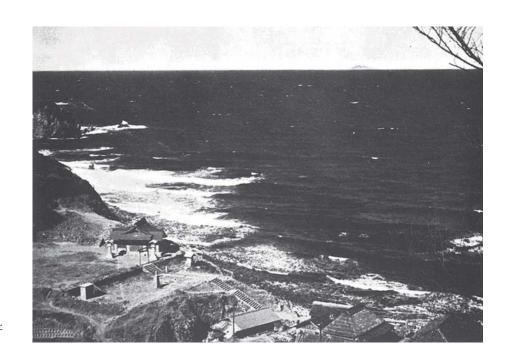


写真 2-b-69 宗像大社沖津宮遙拝所 1960 年頃撮影。水平線上に沖ノ島が 望め、沖ノ島を遥拝する機能を見てと れる。

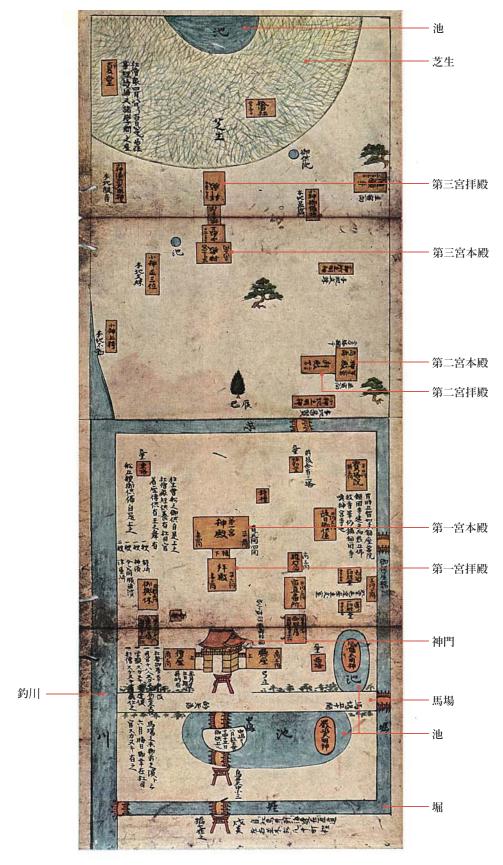


写真 2-b-70 『田島宮社頭古絵図』

 $1624 \sim 1644$ 年頃成立。中世の辺津宮境内の様子を伝える現存最古の境内図。釣川と堀が第一宮を囲み、その奥に第二宮、第三宮が位置している。

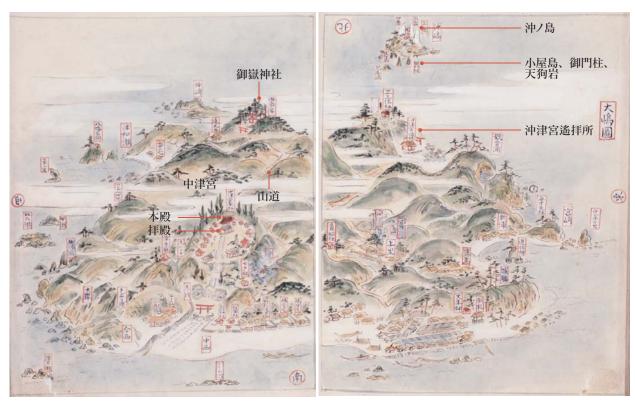


写真 2-b-71 『筑前国続風土記附録』所収「大島図」

1797年成立。福岡藩により編纂された『筑前国続風土記』に続く筑前国(現:福岡県の一部)の地誌『筑前国続風土記附録』所収。大島全体と遠くに沖ノ島が描かれる。現在のように、御嶽山祭祀遺跡に建つ御嶽神社と中津宮社殿とが並立して存在しており、本・拝殿を取り囲むように末社が位置している。



写真 2-b-72 『筑前国続風土記附録』所収「宗像宮」

1797 年成立。1675 年の黒田光之による整備後の辺津宮境内を描いたもの。第二宮、第三宮をはじめとする末社 75 社が本・拝殿を取り囲むように集められた。

2.b.4.4 現在の宗像大社へ

従来、人が常駐していなかった沖ノ島であるが、1639 年以降、福岡藩によって警備のための島守が置かれ、50 日交替で在島した。それに伴って17世紀には、現在も続く「禊」の風習が記録にみえるようになる。また、沖ノ島へ渡島するときは、必ず中津宮で身を清め、潔斎をしなければならなかった。

1794年、島守として赴任した青柳種信もまた沖ノ島に渡るために大島で10日ほど滞在しており、初日に潔斎し、御嶽山にも登山している。そうして沖ノ島に到着すると、まず海水に入り末社の正三位社に参拝した後、7日間毎日海水で身を清め、8日目にようやく沖津宮社殿に参ることができた。現在は、宗像大社の神職が1名10日交代で島に常駐し、毎日社殿での神事を行っている。

1868年の「明治維新後は、神社一般は国家により管理される時代となった。 宗像神社は1901年に最も格の高い神社となった。1946年には宗教法人となり、 1977年に社名を現在の「宗像大社」に改称している。

日本が近代化していく中で、朝鮮、中国、ロシアに近いという地理的要因から、沖ノ島は国境警備上の重要地点となった。1905年、沖ノ島一ノ岳山頂に望楼と灯台が設置され、1937年には島内に砲台・弾薬庫などの軍事施設が築かれた。第二次大戦後は、港として築堤工事が行われた。しかし、巨岩や社殿周辺の開発に対しては特に厳しい制限が加えられ、土地の形状変更や樹木の伐採などのむやみな開発は禁止された。

第二次世界大戦以降、宗像神社が復興を遂げられた一因として、数多くの崇敬団体の結成がある。そのなかでも、1942年、石油元売会社出光興産の創業者出光佐三氏により創設された宗像神社復興期成会は、社殿修理・境内地買収などの境内の整備を行った。さらに、復興期成会は、1954年から1971年まで3次にわたって初の本格的な沖ノ島祭祀遺跡の考古学調査を実施し(写真2-b-73)、3冊の報告書『沖ノ島』『続沖ノ島』『宗像沖ノ島』を刊行した。これにより、沖ノ島では祭祀形態が四段階に変遷することや、「国家的祭祀」としての重要性など、様々な事実が明らかとなり、当時の学界に衝撃を与え、日本における古代祭祀研究の進展に大きく寄与した。それと並行して、20年以上の歳月を費やして『宗像神社史』上下巻及び附巻が編纂され、その綿密な史料の考証によって宗像神社の歴史が客観的に明らかとなった。



写真 2-b-73 第 3 次発掘調査の風景

写真 2-b-74 みあれ祭 (海上神幸)



写真 2-b-75 みあれ祭 (陸上神幸)



写真 2-b-76 高宮祭場における神奈備祭

12 元来インドの河神で、仏教に取り込まれた。後に、日本で市杵島姫神と習合し、「七福神」の一人としてもまつられた。

2.b.4.5 現在まで続く禁忌と信仰

沖ノ島に関する厳格な禁忌は現在も受け継がれている。17世紀以降の文献に、沖ノ島やその禁忌に関して、女性の入島を禁ずることや沖ノ島からは一木一石たりとも持ち出してはならないこと等が記されている。また、縁起の悪い言葉は「忌み言葉」として島内では使用が避けられ別の言葉で言い換えられ、沖ノ島そのものも名前を呼ぶことがはばかられ「御号島」と称されていた。しかし、祭祀遺跡については諸史料に何も記されておらず、見聞したことを口外してはならないという禁忌が守られていたことを示しているとみられる。

現代において特筆すべきことは、途絶えていた宗像神社の神事の復興である。 古来8月15日に行われていた放生会は、10月1日から3日にかけて秋季大祭 として実施されるようになり、現在最も賑わう神事となっている。この秋季大祭 は、10月1日のみあれ祭で幕が開ける。みあれ祭とは、1962年に宗像神社復 興期成会が中世の御長手神事を再興したもので、沖津宮の田心姫神と中津宮の 湍津姫神を市杵島姫神の待つ辺津宮に迎える神事である。二柱を乗せた御座船 を中心として数百艘もの船が大船団を組んで大島から九州本土の神湊へ向けて 行う海上神幸は、宗像地域で最も壮麗な神事である(写真2-b-74、75)。

秋季大祭の最終日には、大祭を無事に斎行できたことを宗像三女神に感謝し、高宮祭場で神奈備祭 (**写真 2-b-76**) が行われる。これも中世の八女神事を再現したものである。

また、1905年の日露戦争の日本海海戦は沖ノ島近くの洋上が主戦場となったが、ちょうど沖津宮に勤務していた神職宗像繁丸がこれを実見し、日記に詳細を記している。戦後、勝利の奉謝のため、連合艦隊司令長官東郷平八郎より旗艦三笠の羅針儀(写真 2-b-77)が宗像神社に奉納された。

この関係から、毎年海戦の日である5月27日に、沖津宮現地大祭(**写真 2-b-78**)が行われ、一般男性が約200名に限り沖ノ島へ渡ることのできる唯一の機会になっている。ただし、この時も上陸前の海中での禊や一木一草一石たりとも持ち出してはならないといった禁忌は厳格に守られている。

元来人々が航海の安全や対外交流の成就を願った宗像三女神は、時代が降ると、水に関わる信仰を集め、全国の水辺や島、池などにまつられるようになる。宗像三女神の市杵島姫神は日本において水の神として最も親しまれていた 弁才天¹²と同一視され、宗像神信仰は日本国中へより一層広がっていった。宗 像三女神は国家の守護神というだけでなく、全国の民衆からの信仰を集める神となっている¹³。福岡県にある宗像大社は、宗像三女神に対する信仰の原点であり、全国の宗像三女神を祭る神社の本社となっている。

特に宗像地域の漁業従事者たちは沖ノ島に対する篤い信仰をもっており、自分たちが沖ノ島を守ってきたという誇りを持ち、慣習的に献魚などをして豊漁や海の安全などを願っている。禁忌や信仰の慣習は、漁業従事者を中心とする宗像地域の人々によって守り続けられてきたのである。

また、宗像大社は、1963年から日本で初めて交通安全のお守りを授与し始め、現在では陸上の交通安全の神としても広く信仰を集めている(**写真 2-b-79**)。

このように、本資産は、古代日本の祭式を伝える稀有な考古遺跡をもつだけでなく、信仰の場として現在まで受け継がれている。

13 1944 年の『宗像三神奉斎神社 調』による統計によれば、日本 全国で宗像三女神のいずれか を祀っている神社は約 6000 社 あるという。



写真 2-b-77 戦艦三笠の羅針儀



写真 2-b-78 沖津宮現地大祭



写真 2-b-79 交通安全のお祓い(1966 ~ 1968 年頃)

表 2-b-3 現在の宗像大社における主要な神事

日付	神事	内容
1月1日~3日	新年祭	新しい年の始まりを祝う儀式
1月13日	献米奉告祭	宗像市、福津市(旧宗像郡)の氏子から奉献された新穀を供え、豊穣に対する感謝、本年の豊作と息災を祈念する神事。
2月3日	節分祭	年男による豆打式の神事が執り行われ、今年一年間の災難厄除、延命招福 を祈念する神事。
(旧暦) 3月15日	沖津宮・中津宮両宮春 季大祭	沖津宮と中津宮の例大祭。
4月1日~2日	春季大祭	本年の豊穣を祈念する神事。古くは保存会といわれ、虫干しを兼ねて参拝 者に神宝を公開したことにはじまる。
5月5日	五月祭・浜宮祭	辺津宮脇を流れる釣川の河口の両岸にある浜宮と五月宮で行われる神事。 稲の生育を祈る神事。菖蒲やちまきが供えられる。
5月27日	沖津宮現地大祭	年に一度、男性約 200 名に限り沖津宮への参拝が許される。
7月31日	夏越の大祓	年に二回の罪穢れを祓う神事の一つ。全国から寄せられた人形(ひとがた; 人の形に切り抜いた和紙に自分の名前を書き、息を吹き付け、罪穢れを託したもの)をお祓いして大海に流し清める。
8月7日	七夕祭	中津宮の神事。社前に七夕の笹竹を立て、それに五色の短冊を飾り、技芸の上達を祈る。
(旧暦) 9月15日	沖津宮・中津宮両宮秋 季大祭	沖津宮と中津宮の例大祭。
10月1日~3日	秋季大祭	国家の平穏、五穀豊穣、大漁を祈り、感謝する祭りで、宗像大社の最も重要な神事。みあれ祭で幕を開け、宗像大社伝承の舞や流鏑馬が奉納される。 最終日には、宗像三女神に秋季大祭が無事斎行されたことを感謝し、神威の無窮を祈念して、高宮祭場で神奈備祭が行われる。
10月17日	献茶祭	表千家家元の奉仕による茶を献ずる神事。
11月15日	七五三祭	子供たちの健やかな成長を感謝し、今後も健康でさらなる成長を祈る神事。
11月23日	新嘗祭	新穀の収穫に感謝する神事。
12月15日	古式祭	その年の新穀で作られた御飯、御酒を神前に供え、神とともにいただく神事。 五穀豊穣、無病息災に感謝する。
12月31日	大祓	一年の間に起こった様々な罪穢れを祓い清めて新年を迎えるための神事。
毎月1日・15日	月次祭	毎月1日、15日に行われる神事。